
能力者犯罪捜査組織総司令官白木綾姫

優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

能力者犯罪捜査組織総司令官白木綾姫

【Nコード】

N7450G

【作者名】

優

【あらすじ】

能力者犯罪捜査組織に勤める白木綾姫はひょんなことから総司令官になってしまう。総司令官となった白木綾姫を待ち構える者は能力を犯罪に使う能力者達。綾姫は能力者達を捕まえる仕事を担当しているときに一人の男に出会った。

第一話 出会い

「お帰りなさいませ、綾姫様。
お勤めご苦労様です」

仕事から帰ってきた白木綾姫しぎあやひめに対して建物の入り口にたたずんで機械的な挨拶をする女性。

「相変わらず堅苦しいわね。
もっとふざけて挨拶できないの？」

対して綾姫はため息をもらしながら女性に答える。

「お疲れ、任務大丈夫だった？
……………これでよろしいのですか、綾姫様？」

さつきとはうってかわって明るい口調で綾姫に挨拶をする。

「……………変わりすぎよ、あんた。
まあ、今度からはそんな感じで頼むわ」

綾姫は態度をガラリと変えた女性に驚いたが、女性の態度に満足して建物の奥へと歩いていった。

小一時間程歩いて、綾姫は一つのドアの前へとやってきた。

コンコン

綾姫はドアに軽くノックを二回する。

すると、中から老人思われる声で挨拶が返ってきた。

「どうぞ」

綾姫はその声を聞くと失礼します、と言いながらゆっくりとドアを開けた。

「ただいま戻りました、総司令官」

「綾姫か、お前はよく働いてくれるな。」

わしが引退してもいい頃合いなのかもしれんな」

中に居たのは真つ白な髭を胸の辺りまで生やしたおじいさんだった。

「そ、それは困ります、総司令官。」

あ、あなた様がいなくなったら誰が部下をまとめるんですか…？」

綾姫は総司令官と言われたおじいさんの言葉に動揺を隠せなかった。

「お前さんが総司令官をやればいいではないか。
わしはもう、あと何年生きられるかわからん」

総司令官は寂しそうに綾姫に言った。

「そんな寂しい事言わないで下さい、総司令官……いや、おじいちゃん」

「ふおつふおつふおつ。」

久しぶりじゃの、お前がわしの事をそう呼ぶのは。

綾姫よ、わかってくれ。

死ぬまでの生活はのんびりと暮らしたいものなんじゃ。

大丈夫、お前なら皆をまとめられるじゃろう」

総司令官……綾姫のおじいちゃんはつつすらと涙を浮かべながら綾姫に優しく笑いかける。

「……おじいちゃん。

わかったよ、おじいちゃんがそう言うなら、あたし頑張って皆をまとめてみるよ」

綾姫は飛びっきりの笑顔をつくってみせた。

「ありがとう、綾姫よ。

じゃあ、この紙にサインをしてくれ。

書き終わった瞬間からお前が総司令官じゃ」

おじいちゃんは手で涙を拭いながら一枚の紙を綾姫に手渡す。

綾姫はもらった紙にサインをした。

「よし、じゃあ頑張ってくれたまえ、総司令官。

わしは女の子とたくさん遊んで最後の人生を楽しく過ごすから」

おじいちゃんはにっこりと笑ってそそくさと歩いて部屋を出ていった。

「……はめられた。

あのくそじじい！

絶対許さないんだから！」

綾姫は握りこぶしをつくって今にも暴れそうな勢いだ。

「まてえ！

このくそじじい！」

綾姫はそそくさと逃げていったおじいちゃんを鬼のような形相で追いかける。

しかし、時すでに遅し。

おじいちゃんは見えない場所まで逃げていた。

「はあ…

これからどうしよう」

綾姫は街の真ん中で一人、空を見上げてため息をはいた。

………

………

…

綾姫はとぼとぼと歩き、さっきまでいた建物に帰ってきた。

「綾姫様、どうかなさったのですか？
血相を変えて走って出ていったので」

建物の入り口にたたずむ女性にまたもや堅苦しい言葉をかけられる。

「はああああ…

どうしたもこうしたもないわよ。

総司令官にはめられて、ついさつきからあたしが総司令官になっちやったのよ」

綾姫はこれでもかというくらいのため息をはいて女性に言った。

「昇格おめでとうございます、総司令官様」

女性は深々とお辞儀をした。

「おめでたくないわよ！」

綾姫は怒鳴ってずかずかと建物の奥へと歩いていった。

綾姫が総司令官になったことは瞬く間に建物中に広がった。

そして翌日。

綾姫は総司令官室で目覚めると、一人の女性がすぐそばの椅子に腰をかけていた。

「おはよう、さつき」

さつきと呼ばれた女性は椅子をくるりと回転させ綾姫の方へ向く。

「おはようございます、能力者犯罪捜査組織総司令官様」

さつきは長い肩書きで綾姫を呼んだ。

「あたしは好きで総司令官になったわけじゃないのに」

綾姫はいじけた。

「ごめんごめん、でも綾が総司令官かなかなか良いとあたしは思っけどね」

さつきは眩^{まぎ}しいほどの笑顔を綾姫に見せた。

「はあ、これからもつと大変になるよ。でも、頑張らなくちゃね」

綾姫はガッツポーズをして気合いを入れる。

「その調子だよ！
で、さっそくなんだけど…」

さつきは言いづらそうにもじもじしながら言葉を繋げた。

「事件が起きたから現場付近を探索してもらえる？」

「え、あたし今起きたばかりなんだけど…」

綾姫は困った顔でさつきを見た。

「あいにく、他の社員達はみんな事件の調査でいないの。あたしもこれから行かなきゃいけないし」

「はあ、最悪だ」

綾姫はため息をはくと、着替えてさつきに事件のあった場所を教わり、建物を出発した。

「なんでこう、次から次へと事件が起きるのよ！でも、退屈しないから別に良いか」

綾姫は事件現場へと車を走らせた。

……

……

…

二十数分後、事件現場へ到着した綾姫は車から降りてゆっくりと歩き出した。

「こりやまたひどくボロボロになっちゃってるね」

綾姫の視線の先には大型の台風が通り過ぎたようにボロボロになった一軒家があった。

屋根の瓦や家のドアやらがあちこちに飛び散っている。

「風的能力者かしら？」

綾姫はこんな状態を作り出せる可能性のある能力を声に出してみた。その声に答えるようにボロボロになった家のなかから声が聞こえた。

「ご名答、さすがは能力者犯罪捜査組織、とでも言うべきか」

男性の声だった。

「来ると分かかって逃げないとは、なかなか根性あるじゃない」

綾姫は楽しそうに言った。

「能力者犯罪捜査組織総司令官、白木綾姫。

お前のような能力者と戦いたいから待っていたのさ」

「……（こいつ、あたしのことを知ってる？

あたしが総司令官になったのは昨日の夜なのに）」

綾姫は心のなかでそうつぶやいた。

「なぜ自分の事を知ってるんだ、と言いたそうだな顔だな」

沈黙する綾姫に対して男が言葉を放った。

「……あんた何者？

心のなかを読み取る能力でもあるの？」

綾姫は怒りに似た表情を男に向ける。

「おいおい、そんなに怖い顔をしないでくれたまえ。

あいにく、私には人の心を読み取る力などない。

ただ、私は自分がお前の立場ならこう考えるだろうと思ったことをそのまま声にしただけだ」

男はさらりと言い放った。

「……良いわ、あんたのお望み通り相手してあげるわ。だけど、その前に一つ聞きたいことがあるんだけど、良い？」

「なんだ？」

「なぜ、あたしの事を知ってるの？
総司令官になったのは昨日の夜なのに」

「それは簡単さ、俺の能力は風。
空気のある場所ならばどこからでも自分の元に声を届けられるからだ。」

声は空気の振動で伝わるものだからな」

「そうだったのね、よく分かったわ。
これで満足したわ。」

教えてもらったかわりに良いことを教えてあげるわ。
六属性の能力ごときじゃあたしには勝てないわよ、とね。
じゃあそろそろ始めようじゃないの」

「

六属性と呼ばれる、火、水、風、土、光、闇の能力は他の能力にくらべて攻撃力が低く、決め手にかける。

能力者を相手にする場合、ダメージすら与えられないこともある。

極めれば強くなる可能性はあるが、扱いが難しいため並大抵の修行では不可能に等しい。

いまだかつて六属性の能力を扱いこなした者は誰一人として存在しない。

よって、世間では六属性の能力は弱いと言われているのだ。

綾姫は腰に下げた刀を鞘からゆっくり抜いた。

「お前の能力は把握している。

イレイズブレイド、能力を打ち消す剣ツメだろ？

だが、私は遠距離攻撃が出来る風の能力を持っている。

たかが六属性の一つとバカにしたことを後悔させてやる」

男は言い放ってすぐに手を高く振り上げ、一気に降り下ろした。

すると風を切るような音と共に綾姫の腕を軽く切りさいた。

「……目に見えない攻撃っては厄介ね。

でも、あたしのことを甘く見ると痛い目に会ってことを教えてあげる」

綾姫は剣を横に構えて男に向かって走り出す。

「近距離攻撃しか出来ないお前は接近するしかない。

だが、私がそんなことをさせるとでも思っているのかな？」

男は余裕の表情を浮かべて右手を前に出し、風を放出した。

「……くっ！

風圧で前に進めない……！

でも、この剣で切れば風を打ち消すことが出来る事を忘れてんじゃないわよ！」

綾姫は風を切るように目の前の空気を切った。

「ふ、そうでなきゃ面白くない」

綾姫にあたる風はよりいっそう強くなる。

綾姫が切り損ねた風は容赦なく綾姫の身体を切り刻む。

「もう怒った！」

本気で戦うから覚悟しなさい！」

綾姫は刀を自分の目の前で華麗に回転させ、風を打ち消しながら男に向かって突進した。

「なっ！」

ならば、最大風力でどうだ！」

男は両手を前にだし、全力で風を放出するが綾姫はひるむことなく向かってくる。

「おとなしく捕まりなさい！」

綾姫が男の目の前に到着すると剣で峰打ちをした。

「ぐわっ！」

わ、私が…負けるなど…」

バタツ、と音をたてて倒れ込んだ。

綾姫は剣を鞘に閉まって一言。

「任務完了」

綾姫は男に手錠をかけた。

「この手錠……能力封じか……
くそっ……！」

男はガツクリとうなだれた。

綾姫は乗ってきた車に男を乗せて車を走らせた。

……

……

…

「お帰りなさいませ、綾姫総司令官様。
お勤めご苦労様です」

能力者犯罪捜査組織に到着した綾姫に堅苦しい挨拶をする女性。

「あゝもう！

何度言ったらわかるのよ……！

堅苦しい言葉は禁止！

わかった？」

「わかった」

これからは注意します。
だから許してね」

女性はおもいつきり明るい声でにっこりと微笑んだ。

「……なんかムカつくわね」

綾姫はボソツとつぶやいた。

「なにか言いましたか……？」

女性は恐る恐る訊^{たず}ねた。

「別になんでもないわよ。」

まあ、これからはあんまり堅苦しくなく、馴れ馴れしくない感じで
接してちょうだい」

綾姫は言うことの聞かない子供に言い聞かせるように言った。

「……わかりました」

「あ、それからこいつを牢屋にぶちこんどいてちょうだい。
あたしは部屋に戻って朝ごはんを食べてくるから」

……

……

…

綾姫が総司令官室にたどり着くとなかにいた女性に話しかけられた。

「あ、おかえり綾」

帰ってきたところ申し訳ないんだけどまた現場へ向かってくれる？」

さつきだった。

「はあ…

総司令官になってもやることは一切変わらないのね」

綾姫はため息をはいた。

「まあしょうがないよ。

能力者の犯罪は全体の80%以上をしめてるんだから」

「はあ…

しょうがない、か…

まあ良いわ。

で、今度の事件はなに？」

「レストランが氷付け」

さつきはさらりと言いきった。

「氷付け！？」

「うん、能力を使って店のなかを氷付けにしたらしいのよ。

だから、店のなかにいるお客さん達を助け出してほしいってこと

それと、犯人はまだレストラン内にいるらしいから気をつけてね」

「はあ…」

今度は氷？

多分能力は水ね。

まったく、さつきの風の男といい、なんで六属性の能力者^{ごとき}が調子にのるのよ…

……わかったわ、行ってくるわよ」

「綾、最近ため息増えたよね」

さつきはあきれ顔で言い放つ。

「わかってるんだったらさつきも手伝ってよ」

「ごめん、あたしこれから現場へ行かなきゃいけないの」

「……もしかして、あたしに仕事押し付けてサボってたりする？」

綾姫はさつきを軽く睨^{にら}んだ。

「まさか！

そんなことしないわよ、親友を疑うの？」

さつきは泣きそうな表情で綾姫を見た。

「そんなわけないわよね、ごめん。
じゃあ、あたし行ってくるわ」

綾姫はさつきに適当に挨拶をかわし、建物をでて車を走らせた。

……

……

…

「うわゝ、見事に氷付けにされちゃってるよ」

現場に到着した綾姫は変わり果てたレストランを見てあきれた。

「ホントだ、まだご飯食べてるじゃない。
あたしもなめられたものね」

レストランの外から見える場所で男性と思われる人物が食事を口へと運んでいた。

綾姫は車から降りてレストランのなかに入った。

「ん？」

「お前警察か？」

食事をしている男はドアが開く音に気付き、綾姫の方へ向いた。

「似てるけど違うわ。」

能力者犯罪捜査組織の総司令官、白木綾姫よ。
あなたが食い逃げ犯よね？」

「似てるけど違うな。
俺は逃げてはいない。」

堂々と無銭飲食をしてるんだ」

男は食事を口へ運びながら言った。

「あらそう、なら逮捕しても構わないわね」

綾姫は腰から剣を抜き、切っ先を男に向ける。

「食事くらいゆつくりとさせてくれ」

突如レストラン中に冷気が充満した。

「さ、寒い…」

ガクガクと身震いした。

「食事終了、んじゃしばらくそこで震えていてくれ」

男は立ち上がり、レストランを出ていった。

「く、寒さで剣をふれない…」

ひ、ひきょうよ、あいつ…!」

1時間ほどガクガクと身震いしていた綾姫はようやく冷気から解放された。

「あのやろう!」

あんな卑怯な手を使って逃げるとは!

六属性の能力ごときで…!

今度会ったら絶対ぶつとばしてやるんだからああああ!」

綾姫は誰もいないレストランで叫んだ。

第二話 マスターアピリター

「おかえり、綾さん。
お仕事ご苦労様です」

レストランから帰ってきた綾姫を迎えたのは建物の入り口にいつも
たたずんでいる女性だ。

「うん、そういう挨拶をあたしは望んだの。
やれば出来るじゃない」

いつの間にか綾姫の機嫌は良くなっていた。

「はい、頑張りました。
では、これからも私は見張りを続けていますね」

「ごめんね、いつもいつも見張りばかりやらせちゃって」

綾姫は申し訳なさそうに女性に言った。

「いえ、いいんですよ。
見張りも立派な仕事ですからね」

女性はにっこりと微笑んだ。

「じゃあ、あたしは朝ごはん食べてくるね」

そう言って綾姫は返事も聞かずに歩き出す。

「いつてらっしゃい」

女性の声に綾姫は後ろを振り向かず、手を降って答えた。

総司令官室に到着した綾姫は部屋を見回したが、さつきは見当たらなかった。

「さつきも仕事があるって言ってたから、いなくて当然か」

誰に話したわけでもなく、一人でつぶやいた。

「やっと朝食にありつけるわ」

綾姫は部屋のなかにある冷蔵庫から適当に食材を取りだし、料理を始めた。

二十分程経過すると綾姫は料理を食べ終えて部屋のベットに座ってゆっくりしていた。

「ふう、やっと落ち着けたわね…」

その時、プルルルルと電話が鳴り響いた。

綾姫は受話器を取り、挨拶をする。

「はい、もしもし。

能力者犯罪捜…」

綾姫が言葉を言いきる前に相手は言葉を繋げた。

「綾、援護を頼みたいの！
今すぐ来る？」

聞き覚えのある声。

「さつき！？」

今どこ？今すぐ向かうから！」

綾姫は声を聞いただけでさつきだと言うことを瞬時に把握して、さつきがピンチだということも一瞬で把握した。

「かえでビルと商店街の間にある十字路よ！
待つてるから…！」

「わかった、必ず助けるわ！
だから安心して待っていてちょうだい」

綾姫は受話器を乱暴において、電光石火のごとく、建物を飛び出した。

車に乗り込んだ綾姫はサイレンを鳴らして車を走らせた。

サイレンを聞いた他の車は端へよる。

空いた空間をもうスピードで突っ走る綾姫の車。

そのおかげで、数分で指定された現場へ到着することが出来た。

普通に走っていたら三十分程かかっていただろう。

「綾、早かったね！」

車から降りた綾姫にさつきが声を放つ。

「状況は？」

「捜査員が七人ほど意識不明の重態。
相手の能力は爆発だと思うわ。」

綾、あたしはどうしたら良い？」

「さつきは捜査員を病院へ運んでちょうだい。
あと、現場を封鎖して。」

通行人が入らないようにしてちょうだい」

綾姫は冷静にさつきに指示を与える。

「わかった。」

綾、気をつけてね」

さつきは心配そうな表情で綾姫の手を握る。

「大丈夫！」

綾姫は手を握り返す。

そして、それぞれの役目を果たすため綾姫とさつきは別々の方向へ
走った。

犯人を見つけるのに、そんなに時間はかからなかった。

「ははははは！」

「これが俺の能力だ！」

男が黒い玉を投げ、それが地面にあたった時に爆発が発生した。

「民間人に手を出すなんて……！」

綾姫は腰から剣を抜いて男に向かって走る。

「……っ！」

「誰だ、お前！」

男は、剣を持って走ってくる綾姫に気付き、怒鳴った。

男と綾姫の距離が十メートル程になった時に綾姫は立ち止まり、剣を前方に構えて男に対して怒りをあらわにした。

「それくらいにしたらどうなの！？」

「やだね、せっかく能力を手に入れたんだ。

今までは違う生活をしてみたいと思うのは当然の事だろ？」

男は不気味に笑った。

「気持ちにはわからなくもないけど、犯罪のために能力を使うのは許せないわ！」

「覚悟しなさい、犯罪者！」

綾姫は剣を横に持って男に向かって走る。

「生意気な女だな！
これでもくらえっ！」

男は手のひらに黒い玉を作り出し、野球の投球フォームで投げた。

綾姫はその黒い玉を華麗に切り、打ち消した。

「なっ！」

消しただと…？

お前…何者だ……？」

男はものすごく動揺していた。

「あたしの力は能力打ち消し。

この剣で切った能力は例外なく全て打ち消すことが出来るの」

綾姫はそう言って戦意を喪失した男に手錠をかけ、車に乗せて能力者犯罪捜査組織に連行した。

「さつきもちよつと強くなってもらわないと困るわね」

綾姫は車を運転しながら一人言をつぶやく。

「明日あたりに、みんなの能力向上トレーニングでもさせなきゃダメね」

「ってあたし最近、一人言増えた…？
はあ…、ってため息も増えたんだよね」

綾姫は一人で悲しんでいた。

その時、道路を滑っている男性が綾姫の目に止まった。

「何もない道路を滑っている…？」

「ああああ！あいつ！」

綾姫はその男に見覚えがあった。

適当に車を止めて男を追いかける。

「待ちなさい、その能力者！」

綾姫の声に気付く、男は後ろを向き綾姫を視線にとらえながらそのまま後ろへ滑っていく。

「止まりなさいよ！」

「…つたく、うるさいぞ小娘。
俺がなにかしたのか？」

男は綾姫と初めて会ったかのような態度で接する。

「忘れたとは言わせないわよ、食い逃げ犯！」

「……あ、あんときの小娘か。
いや、あのときは持ち合わせがなくなくてな。
とりあえず氷付けにしてしまったんだ、許せ」

男は悪気もなく無邪気に笑った。

「許さないわよ！」

それに、さっきから小娘小娘って！

あたしには白木綾姫っていう名前があるの！」

h?

白木……綾姫……？」

男は名前を聞き間違えたのかと思い、綾姫に聞き返す。

「そう、白木綾姫！」

「ぶつ！」

だ は は は は は は は は !

わははははは、ひーひひひひひ！」

男は笑い転げた。

「な、なにがそんなにおかしいのよ！」

綾姫は恥ずかしさと怒りが混ざったような変な表情を浮かべた。

「あはは、お前が……姫。」

わははははははは！

似合わねえ！

あはははははははははは」

男は大爆笑。

ブチッ！

何かが切れたような音がした。

「あんた、絶対ぶっ飛ばす！」

綾姫はキレた。

「やってみな」

男はいつの間にか笑うのをやめて余裕の表情を綾姫に見せていた。

「たかが六属性の能力ごときで調子に乗ってんじゃないわよ！」

綾姫が腰にぶら下げた剣を鞘から抜き払うと、その勢いを殺さぬまま男に切りかかった。

「吹っ飛べ」

男は冷静に言い放って綾姫のおでこに近くに手を出した。

「きゃあああああ！」

綾姫はそんな悲鳴をあげながら後ろへかなりの距離、吹っ飛ばされた。

「な、なんなの…？」

水の、能力者じゃ…ないの……？」

綾姫は頭を押さえながら、冷静に分析するが答えは出なかった。

「ちゃんとした水の能力だ。

今のは水蒸気爆発。

俺はお前のおでこの前に小さな水の塊を形成し、それを一瞬で気化させたのさ」

男はいまだに余裕の表情をくずさない。

「水蒸気……爆発……？」

そんな……バカ……な」

綾姫はそのまま意識を失った。

………

………

…

気が付いた時には綾姫は総司令官室のベッドに横になっていた。

「あれ……？」

なんで、あたし……ここに……いる……の？」

頭が痛くて思うようにしゃべることが出来ない。

「通報があつてね。

女性が倒れてるから救助を、って」

綾姫に話しかけたのはさつきだった。

「そう、か…

あたし…あいつに、負けて…」

ようやく記憶が覚醒してきた。

「……まさか、綾が負けるなんてね。

でも、今はおとなしく眠っていて。

疲れも溜まってるんでしょ？

良い機会だから、休んでよ」

さつきは優しく綾姫に微笑んだ。

「うん、ありがとね…さつき」

綾姫はそれだけを言ってまた眠りについた。

「綾姫、強くなったな。

私に追い付いたんじゃないか？」

なにこれ？

夢？

お父さんがいるし、昔の夢を見てるの？

「どうしたんだ、綾姫？

元気ないじゃないか？」

懐かしい…

この時は、毎日が幸せだった。

でも、この後…

あたしの幸せは、終わった…

「綾姫…

逃げるんだ…！」

「お父さん！嫌だよ、お父さんも一緒に逃げるの！
お父さん！」

今でも覚えてる。

あのときの事は、忘れることができず、頭のなかに残り続けてるから。

「綾、ねえ綾ったら！

返事してよ、綾！」

さつき……？

これも、夢……？

綾姫はゆっくりと目を開けた。

「良かった、すごく苦しそうになってたから心配したんだよ?」

さつきの声で目覚めた綾姫は、あれからどれくらい眠っていたのだろうかと考えながら身体を起こした。

「もう傷は大丈夫なの?」

さつきは心配そうな表情で綾姫を見る。

「うん、大丈夫みたい。

身体もちゃんと動くし」

綾姫はさつきを安心させるように、元気だという事をアピールした。

「そっか、安心した。

怖い夢でも見てたの?」

さつきはまた心配する。

「あ、うん。

ちよっと昔の事を思い出してたみたいで…」

「そっか…

つらい記憶、だよね」

さつきは全てを理解して申し訳なさそうにうつむいた。

「大丈夫よ、たいした事ないから。

だから、そんなに心配しないで」

綾姫はさつきに抱きついて背中を軽くさすりながらささやいた。

「うん、わかった。」

でも、綾姫が負けるなんて、相当強い能力者だったの?」

さつきは抱きついていて綾姫をゆっくりとはがした。

「うん、六属性の能力者だったんだけど。」

あの、爆発男を捕まえて車を走らせてたら出くわしてね。

実はそいつ、レストランを氷付けにした犯人でさ、前回は取り逃がしちゃったから今度は捕まえようと思ったんだけど……」

そこで綾姫はうつむいた。

「やられちゃったわけだ。」

まさか六属性の能力者で綾姫に勝つなんてね……」

「水蒸気爆発、とか言ってたわね……あいつ」

綾姫は自分の記憶をさぐり、敵の攻撃方法を思い出した。

「水蒸気爆発……」

そいつ、もしかしたらマスターアビリターかも!」

さつきは何かにひらめいたように綾姫に言った。

「マスターアビリター?」

綾姫は聞いたことない単語をさつきに聞き返した。

「マスターアビリターっていうのはその頭文字を取ってM・Aと呼ばれることもあるの。」

いまだかつて存在したことのない、言わば空想上の人物として語られてるんだけど。

アビリテイ、まあ能力の事ね。

そのアビリテイをマスターした者をマスターアビリター…通称M・Aと呼ぶの」

「つまり、水的能力をマスターしてる可能性があるってこと？」

綾姫は間髪入れずに質問する。

「その通り。」

水の能力者は大抵、水を放出したり水の上を走ったり、という初步的な事しか出来ないはずなの。

でも、綾姫を倒したそいつは水を氷に変えたり水蒸気に変えたりしてたんでしょ？

可能性としてはあるかも、ってこと」

さつきの言葉には説得力があった。

「確かに可能性はあるわね、でもおじいちゃんが六属性の能力は弱いつて言ってたし」

「それは六属性の能力が扱い憎く、素人が使っても攻撃力が低く決め手にかけるからって聞いたことがあるの」

その時、背後（ドアの方）から男の声がした。

「その女の言う通りだ」

二人は声のした方へとつさに振り向く。

そこにいたのは…

「あんだ、水的能力者！
どうやって侵入したの？

それと、何しに来たの！？」

綾姫を倒した男だった。

「お前が名乗って俺が名乗らないのは失礼だと思ったからな
侵入方法は簡単さ、教えねえけど」

「わざわざ名乗りに来たっていうの？」

綾姫は警戒しながら男を見る。

「そうだ」

男は綾姫の目をみて自分の名前を名乗った。

「俺の名は氷室龍夜。
ひむろりゅうや

知ってると思うが水的能力者で、極一部の人間からはマスターアビ
リターと呼ばれている。
以上」

龍夜と名乗った男はそのまま立ち去ろうとした。

「待ちなさいよ、今こそ捕まえて牢屋にぶちこんであげるわ！」

綾姫は腰から剣を抜いて前方に構えた。

「ふつ、お前ごときじゃ俺を捕まえるなど絶対に不可能だ」

突如部屋中に冷気が充満した。

「また、このひきょうな、ほ、方法で…！」

綾姫はまたしても目の前で逃げられてしまう。

綾姫とさつきは仲良く、約一時間の間、 - 30 程度の部屋でガクガクと身震いした。

第三話 イレイズブレイド

「まったく、氷室龍夜め！

次は絶対にぶっ飛ばしてやるんだから！」

綾姫は元の温度に戻った部屋で叫んだ。

「まあ、気持ちにはわかるけど…

正直、実力が違いすぎるよ。

マスターアビリターだって本人も言ってたし…」

さつきは敵とのレベルの違いを親切に綾姫に教えた。

「マスターアビリターだかなんだか知らないけど、このイレイズブレイドで切ってしまえば問題ないわ！

どんな強力な能力でも打ち消してしまう剣なんだから！」

綾姫は剣をさつきに見せながら言った。

「でも、三回も逃げられたんでしょ？

もうちょっと強くなってから」

さつきの言葉をさえぎるように綾姫が言葉を放つ。

「あたしはあいつを捕まえる！

今度出会ったら本気でやる！」

「…負けず嫌いなね、綾」

さつきはボソツとつぶやいた。

「え？

なにか言った？」

綾姫には聞こえなかったようだ。

「ううん、なんでもないよ」

さつきは首を横に降ってごまかした。

その時、不意にブルルルと部屋の電話が鳴り響いた。

「はい、こちら能力者犯罪捜査組織です」

綾姫が電話に出た。

「はい、はい、はい…

わかりました、ご連絡ありがとうございます」

綾姫は電話を受話器にそつと置いてさつきの方へ向きなおった。

「仕事？」

さつきは綾姫に訊ねた。

「うん、人が殺されたらしいわ」

綾姫の表情から読み取れる感情は怒り。

かなりキレているようだ。

「…わかった。

一人で…大丈夫…？」

その顔に威圧されさつきは恐る恐る訊ねた。

「うん、大丈夫。

ここで待機して事件発生に備えといて」

綾姫はそれだけを言うと建物から出ていった。

「はあ…

久しぶりね、綾の激怒の表情を見たのは」

さつきは一人になった総司令官室で気を落ち着けるようにため息をはき、言葉をはいた。

………

………

…

車に乗り込んだ綾姫はサイレンを鳴らして現場へ向かった。

十分程で現場についた綾姫がみたのは所々（ところどころ）に丸い穴が空いて見るも無惨に死体が転がっている光景だった。

「…ひどい……！」

絶対に許せない！」

綾姫は車から降りて握りこぶしをつくりながら現場の中心へと足を運んだ。

そこにいたのは氷室龍夜だった。

「…あんたがやったのね、氷室龍夜！！！」

綾姫はこれでもかというほどの大きな声で現場にたたずむ氷室龍夜を怒鳴り付けた。

「あ？」

俺じゃねえ、どうやら針の能力者の仕業みたいだぜ」

綾姫は怒りの矛先をどこへ向けて良いのかわからなくなり、氷室龍夜をみた。

「ホントにあんたじゃないのね？」

「しつこいやつだ。」

俺は人を殺さないと誓った。

このマスターアビリターの紋章にかけて」

そう言いながら氷室龍夜は右腕をちよつとまくり、氷の結晶によく似た紋章を綾姫に向けて見せた。

「…そう」

綾姫はそうつぶやき、氷室龍夜に対して剣を抜いて前方に構えた。

「ん？」

なぜ俺に剣を向けるんだ？

犯人は俺じゃないってわかってくれたんじゃないのか？」

氷室龍夜は剣を向けて立つ綾姫に疑問を抱かずにはいらなかった。

「この事件の犯人はあんたじゃない。
それは納得したわ。」

あんたの能力じゃなさそうだしね」

「じゃあなぜ俺に剣を向けて立ってるんだ？」

氷室龍夜はまだ理由がわからないようだ。

「人を殺してどっかへ逃げてしまった犯人より目の前にいる軽犯罪者の方を捕まえるのは当然でしょ？」

「まだこりてなかったのか？」

なんというか、無謀と言いか無鉄砲というか、バカというか」

氷室龍夜はこりずに立ち向かってくる綾姫をあわれみに似た感情で見つめた。

「覚悟しろっ！

氷室龍夜ああ！！！」

怒りに任せて氷室龍夜に特攻する。

「…（怒りで俺の冷気を感じずらくしたのか。

動きも格段に早くなっている。

こいつ、怒ると強くなるタイプか。
ふっ、久しぶりに楽しめそうだな」

氷室龍夜は綾姫の攻撃をかわしながら頭のなかで綾姫を多少、評価した。

「少しは良くなったじゃないか。
だが、攻撃に隙が有りすぎる」

綾姫の攻撃を華麗にかわし、隙だらけの足に氷の刃を放出した。

「ぐっ！」

綾姫の右足に小さな氷の刃が突き刺さった。

「まあ、お前みたいに本能だけで動いてるようなやつは嫌いじゃないぜ」

「なっ！なに言ってるのよ、あんた！」

綾姫は顔を真っ赤にしてうつむき、攻撃をやめた。

「ん？顔が真っ赤だぞ？」

氷室龍夜はうつむいて真っ赤になった綾姫の顔を覗き込む。

「あ、暑いのだよ！
ほ、ほら、い、今、夏だし！」

綾姫は動揺してうまくしゃべることが出来ない。

「まあ良いか。」

それより、まだ続けるのか？」

氷室龍夜は綾姫をからかうのをやめてあきれ顔で訊ねた。

「当たり前よ！」

マスターアビリターだかなんだか知らないけど、あたしからは逃げられないってことを教えてあげるんだから！」

綾姫の動揺は怒りで綺麗さっぱり消え失せた。

「あつそ、それが三度も逃げられたやつに言うセリフか？」

「あたしの本気を見せてあげる」

綾姫はさらに攻撃速度をあげて氷室龍夜に切りかかる。

「…（まだスピードがあがるのか。」

こいつ、いつか大物になるかもな）」

またもやかわれるが、諦めずに切りかかる。

「…（避けきれない！）」

氷室龍夜は後ろに飛び、綾姫から距離を離れた。

「逃げるなっ！」

すかさず氷室龍夜に向かって走り出す。

向かってくる綾姫に対して、氷室龍夜も走り出す。

やがて二人の距離が近づいて、綾姫は左から右へと剣を降り、敵を切ろうとした。

それに対して氷室龍夜は自分の目の高さ程に手を差し出し、小さい水の球体を作り出した。

「同じ手は通用しないわよ！」

綾姫は水の球体ごと氷室龍夜の手を切り裂いた。

「くっ！…（俺の水を完全に消した…？）
これがこいつの能力か？」

氷室龍夜は切られた手を軽く押さえた。

「はあ…はあ。
どう？」

前のあたしとは、ひと味違うでしょ？」

息をきらしながら綾姫は勝ち誇る。

「…どうやら甘く見すぎていたようだな。
さっきのがお前の能力か？」

「そうよ、イレイズブレイドっていうの。
この剣で切った能力は例外なく全て打ち消すの」

「やるじゃねえか。」

だが、俺の敵ではないな。

また強くなってから出直してこい」

「なによ、あたしの強さに怖^おじ気^けづいて逃げ出すの？」

綾姫は完全に勝利を確信していた。

「お前は自分の実力と敵の実力を把握できないのか？
たかが傷一つ与えただけで自惚^{うぬぼ}れてんじゃねえよ！」

氷室龍夜は凄まじい殺気を綾姫に見せた。

「あ…う…」

その殺気に気圧^{けお}され、綾姫は身体はおろか、口さえまともに動かすことが出来なかった。

「これからは相手の力をちゃんと把握するようにしろ。
でないと、いつか命を落とすことになるぞ
せつかく楽しめそうなやつと出会ったのに、簡単に死んでもらうて
はこまる」

氷室龍夜は綾姫にそれだけを告げ、その場から立ち去った。

「う、動けなかった…」

なに、あの凄まじい殺気は…！

あんなの、勝てるわけない…じゃない」

綾姫はしばらくの間、氷室龍夜とのレベルの違いを改めて認識して、その場から動けないでいた。

………

………

…

あとから心配になって応援に駆けつけたさつきは生気を失ったようにぐったりと座り込んでいる綾姫をかかえて乗ってきた車で能力者犯罪捜査組織へと連れて帰った。

「さつき…？」

長い間黙り込んでいた綾姫がようやく口を開いた。

「…大丈夫？

完全に生気を失ったような目をして黙り込んでいたけど…」

さつきがこれまでにないくらい心配してくれているのが綾姫にはわかった。

「うん、心配させてごめんね。

もう…大丈夫だよ」

綾姫は申し訳なさそうにさつきに言う。

「…何があつたの？」

さつきは恐る恐る訊ねる。

「氷室、龍夜に出会ってね。
勝負をしたんだけど。」

あたしは怒りに任せて氷室龍夜に切りかかって、あいつの手を切り裂くことが出来たんだけど…

そのあと、この世のものとは思えない、今までに見たこともない殺気を感じてね。

しばらく動けなくて、気が付いたらさつきと一緒にここにいたってわけ」

綾姫はさつき起きたことを丁寧に説明した。

「そんなことがあったのね…

さすがはマスターアビリターと呼ばれる男…
ただものじゃないね」

さつきも氷室龍夜の実力を把握して怯えながら言った。

「あたし達、強くならなきゃダメね。

でも事件ばかりで修行なんてしてる余裕ないのよね…。
さつきの殺人事件の犯人も見つけ出して捕まえなきゃならないし」

コンコン

不意に総司令官室のドアがノックされた。

「どうぞ」

綾姫はドアの向こうにいる者に部屋に入るように言った。

「失礼します。」

綾姫様、警察の方が来たのですがどうすれば良いですか？」

見張り役の女性だった。

「警察？」

なんのようかしら？

まあいいわ、ここに案内してきてちょうだい」

「はい、わかりました」

女性は軽くお辞儀をして部屋を出ていった。

女性が部屋から出た後、綾姫とさつきは二人そろって首をかしげた。

コンコン

一分程たった時、再びドアがノックされた。

「連れて参りました」

ドアの外から声が聞こえた。

「はいつて良いわよ」

ガチャリ、と音をたてて見張り役の女性と二十歳くらいの青年が部屋に入ってきた。

「警察があたしになんのようですか？」

「はい、本日付でほんじつづけこの社員になることになりました、岩瀬貴志と申します。
よろしく願います」

貴志と名乗った青年は丁寧に挨拶をして深々と頭を下げた。

「はあ？」

なんの冗談？

今どきそんな冗談じゃ笑えないわよ」

綾姫はバカな子供を見るような目付きで貴志を見た。

「実は、ついさっき僕が担当していた事件で突然、異能力に目覚めたみたいで…
こちらに移動するように言われて来たのですが…」

「あらそう。

まあ人手不足だったから助かったわ。

しばらくの間はあたしが直々に対能力者用の戦い方を教えてあげるわ」

綾姫は嬉しそうに笑った。

「はい、よろしく願います」

貴志は再び頭を下げた。

第四話 能力の暴走

「まず、あんたの能力を教えてちょうだい」

一人になった総司令官室で綾姫は貴志に言った。

さつきは事件で出かけ、見張り役の女性はまた見張りをするため、建物の入り口へと戻ったからだ。

「筋肉増強、だと思います」

貴志は自分の能力を思い出しながら適切な表現を探して綾姫に答えた。

「筋肉増強ね、わかったわ。」

もう一つ質問、自分で能力の発動は出来る？」

「出来ます。」

なぜか、この能力に目覚めた時に頭に知識が入り込んできたみたいで……」

貴志は自分に起きたファンタジーな出来事を信じられないとも言いたそうな表情で綾姫に話した。

「まあ、素人が能力に目覚めた場合その能力について、ある程度の知識が頭にぶちこまれるのよ」

「はあ……」

貴志は能力についてまったくのド素人なので綾姫の言っている意味が良くわからないでいた。

「まあ、いきなりこんなこと言ってもわからないわよね。

でも、ここで仕事をするんだったら能力とそれをつかう能力者について勉強してもらわないとこまるわ」

「はい、頑張ります！」

貴志はガッツポーズをとり元氣良く言った。

「能力に目覚めた人間はたいいてい自分の力を試そうと事件を起こしたり、強力な力を手に入れたことにより自信がついて、誰にも負けない、などと考える愚か者が事件を起こしたりするの。

あんたみたいに警察に所属していた人間が能力に目覚めたのは初めてだけど、人を助けたいと思う気持ちがあれば能力で事件を起こしたりはしないとあたしは信じてる」

「はい、僕は犯罪なんて起こしません」

貴志は自信満々に言いきった。

「うん、それでよし。

まあ、能力に目覚めた人間の90%以上が犯罪に手を出してしまうの。

だから、あたし達みたいに能力を使って人を助けようと思うのは極わずかな人しかいないから、人手不足になってしまうのよ、あんたみたいな人が一人でも多く来てくれるだけであたしは嬉しいわ」

綾姫は笑顔で言った。

「……」

貴志は黙って真剣に綾姫の話を聞いていた。

「それと、能力に目覚めた人間は簡単には死なないわ。どんな能力であれ能力の恩恵を受けるの。

簡単に言えばあんたは能力の恩恵を受けているから身体へのダメージを減らしている、ということ。

例をあげると、今のあんたに拳銃で撃つても痛いと感じてアザが残る程度っていうこと」

「はあ……」

貴志はファンタジーな話に完全についていけない。

「まあ、試してみるのが一番早いんだけど、無駄にアザをつくるのはあんまり良くないわよね。

とにかく、あたし達能力者は人間とは比べ物にならない耐久性を持っているということ。

それはあたし達だけじゃなく、犯罪を犯すような者も同じ。

だから対能力者用の戦い方を知ってもらわないと使い物にならないのよ」

「なんとなくわかりました。

つまり、僕は能力についての知識をつけて強くならなくてはいけない、ということですね」

「その通り、あんた物分かり良いわね。

あたしなんか初めは全然信じられなかったのに。

まああたしの場合は時間が解決してくれたけどね」

綾姫は過去を振り返って貴志に話した。

「初めはみんな戸惑ったりするけど、あんたは違うわね。
正直、凄いと思うわ」

綾姫は尊敬の眼差しを貴志に向ける。

「わからないことがあつたらドンドン質問して良いから。
答えられないこともあるかも知れないけど分かる範囲で答えるから」

「さっそく質問なんですが、なんで僕みたいな普通の人が能力に目覚めるんですか？」

「理由は詳しく分かってないわ。

ただ、怒りとか悲しみとかの感情が極めて高くなったときに能力に目覚めることが良くあるみたいね。

あんたが能力に目覚めた時、なにを考えていたの？」

「僕は、自分にもっと力があれば…

誰かを救うためにもっと力があれば…

力が欲しい…

って考えていたら能力に目覚めていました」

「誰かを救いたいと思って能力に目覚めるなんて…
素晴らしい事だわ。

その気持ちは大事にしてね」

綾姫は飛びっきりの笑顔で貴志に言った。

「…（か、かわいい）」

貴志は笑顔の綾姫に一目惚れに似た感情を抱いた^{いだ}。

綾姫はそのことにまったく気が付いていないが…

「あたし達の仕事は二つ！

一つは、能力者の犯罪を捜査、解決。

そして犯人の確保。

確保した犯人が気持ちを変え、人を救うために力を使うように説得し、仲間に加えること。

もう一つは、能力に目覚めた人間を保護すること。

子供でも能力に目覚める人はいるからね。

能力者ってというのは普通の人から見たら化け物に他ならないから、いじめの対象になったり親からも嫌われて行き場をなくすようになることもあるの。

だから、そういった人達の保護。

そして、やる気があるようなら仲間に加わって一緒に人々を救う手助けをしてもらう。

この二つの信念のもとにあたし達は行動してるの」

「はい、僕もその信念のもとに行動します！」

貴志は真剣に綾姫に言った。

「そうだ、すっかり忘れていたわ。

まだ自己紹介してなかったわね。

あたしの名前は白木綾姫。

ここ、能力者犯罪捜査組織総司令官を勤めている白木綾姫よ」

綾姫の自己紹介が終わるとプルルルルと電話が鳴り響いた。

綾姫は受話器をとり、電話の向こうにいる相手と話をし、話が終わると受話器を置いて貴志をみた。

「貴志君、初仕事よ」

綾姫はそう言って貴志と共に現場へ向かった。

「どういう事件なんですか？」

車で現場へと向かっている途中で運転中の綾姫に疑問を投げ掛けた。

「能力者が民間人を相手に攻撃。
負傷者多数、犯人は現在も攻撃中。
あたし達の仕事はその犯人を確保、そして民間人の救出」

綾姫は丁寧に説明する。

「で、僕はなにをしたら良いんですか？」

「犯人の確保」

綾姫はさざりと言いきった。

「え！？」

貴志はまさか自分がいきなり危険な仕事を任されるとは思ってたので驚いた。

「大丈夫よ、危なくなったら援護するから。
安心して戦いなさい」

綾姫は笑顔で言い放つ。

「…わかりました」

貴志は観念したようにうなづいた。

「はい、到着」

綾姫は軽快な口調で言っ て車から降りた。

それに続くように貴志も車から降りる。

「あいつが犯人ね。」

ほら、貴志君、勇気をもって行っ てきなさい」

「は、はい！」

貴志は緊張してるのか恐怖なのか分からないが震えが止まらなかったが、綾姫の言葉に答えるように犯人のもとへ歩いていった。

「さて、あたしは民間人の救出をしなきゃ」

綾姫は自分の役割をこなした。

傷ついた民間人は救急車で運んでもらい、逃げ遅れた民間人の肩をとり安全な場所へと避難させてから犯人のもとへ歩いていった。

犯人と貴志が格闘しているのが遠くからでも良くわかった。

「たぁぁぁ！」

貴志の身体は筋肉で膨れ上がっていて元の二倍近くの大きさになっていた。

「すごい筋肉ね。」

あれはあたしでも体術では勝てないかも」

今のところ貴志が有利に戦いをしている。

「…（貴志君、鍛えればまだまだ強くなるわね）」

相手の能力は土。

土を小さな塊として形成してそれを放出したり。

狭い範囲で地震を起こしたり出来る能力者。

だが、筋肉増強した貴志はその土の塊を殴ることで粉碎している。

「あたしの出番はなさそうね」

綾姫は二人に近付きながらつぶやく。

貴志はトドメの一撃と言わんばかりに大きく降りかぶり、犯人の腹をぶん殴った。

「初めてにしてはなかなかやるじゃない」

綾姫は貴志を誉め、犯人の両手に手錠をはめた。

「この手錠は能力を封じる特殊な加工が施されてるの。だから、これをはめてしまえば能力者は能力を使えなくなるの」

綾姫は貴志に説明して、犯人を車に乗せて能力者犯罪捜査組織総へと連行した。

「見事な初仕事だったわ。でも、あまり調子に乗らないでね。これは受け売りなんだけど、相手との実力の差をちゃんと把握すること。」

決して自分の力を過信しすぎないように
ちなみにさっきの犯罪者は六属性の一つ、土の能力者。
六属性の能力者はたいてい弱いわ。

まあ、マスターアビリターなんていう化け物もいるけどあれは例外だから」

綾姫は氷室龍夜に言われた事を貴志に教えた。

「はい、わかりました」

「あとは、貴志君の部屋だけ…」

しばらくは総司令室であたしと一緒に待機してちょうだい。

貴志君が一人でも任せられるくらいになったら部屋を与えるわ」

綾姫はそう言って貴志と共に総司令官室で次の事件の連絡を待った。

五分もしないうちにプルルルと音をたてて電話が鳴り響いた。

「はい、こちら能力者犯罪捜査組織です。

はい、はいわかりました。

ご連絡ありがとうございます」

綾姫は受話器を置いて貴志をみる。

「仕事よ」

「ずいぶん忙しいんですね。

警察に所属してたときは暇な時間がたくさんあったんですが」

「そりゃそうよ。

事件全体で能力者の犯罪は80%以上をしめてるんだから」

綾姫と貴志は車に乗り込み、事件現場へ急いだ。

………

………

…

五分程で現場についた二人は車から降りて犯人を探した。

「逃げられたか…！」

まだ近くにいるはずよ、追いかけましょう」

綾姫は走り出す。

それに続くように貴志も走り出す。

「手がかりはあるんですか？」

貴志は走りながら綾姫に訊ねた。

「周りをよく見てみなさい。
建物が破損してるでしょ？」

犯人は逃げながら周りを破壊してるのよ。
手がかりを残して逃げてるからそのあとを追えばいいのよ」

「確かに、すごいですね。

綾姫さんは冷静に辺りを観察して最善の方法を瞬時に導き出して
いて尊敬します」

「何年この仕事やってると思うのよ。

ほら、いたわよ。

行っただけなさい、危なくなったら援護するから」

そう言っただけ綾姫は貴志の背中を押した。

「はい、行っけます」

貴志は犯人を視界にとらえ、筋肉増強の能力を発動した。

「待て！」

貴志は犯人に向かって叫んだ。

「ちっ、もう来やがったか」

犯人は立ち止まって貴志に向き直る。

「おとなしくしろ！」

抵抗するなら力づくで取り押さえるぞ」

「くそっ！」

やってやるうじゃないか」

犯人の男は大きく息を吸い込んで叫んだ。

「うおおおおお！！！」

人間の声とは思えないほどの大音量で叫ぶ犯人。

その犯人の周りは大音量の声により所々にひびが出来た。

貴志は耳をふさいで苦しんでいる。

「どうだ、これが俺の能力だ。

捕まえられるのなら捕まえてみやがれっ！

はははははは」

犯人の男は自信満々に微笑んだ。

「まだまだ！」

貴志は男に向かって猛スピードで走り出す。

「な、ならばこれでどうだ！
だあああああああ！！！」

男はさつきよりも大きな音量で叫んだ。

「ぐっ！耳が痛い。」

でも、僕は綾姫さんに犯人の確保を任されたんだ！
絶対に成し遂げる！」

貴志は怯むことなく男に向かって走っている。

「こ、この化け物が！」

犯人の男は突進してくる貴志に恐怖し、その場に座り込んだ。

「…（あのとき、僕に力があれば…
人を救えたのに！）」

その時、貴志の筋肉はもとの身体の五倍近くに膨れ上がっていた。

綾姫はその異変に気付き貴志のところへ走り出した。

「お前なんかっ！
お前なんかあ！」

貴志は既に意識を喪失した犯人に攻撃を繰り返した。

「ちょっと、貴志君！？
もういいわよ！
もうやめていいわよ！」

綾姫は豹変した貴志に恐怖感を抱きながら貴志を止めようとするが…

「ガアアアア！」

とてつもない腕力で弾き飛ばされる。

「…（なにこの腕力！？
いったい貴志君の身に何が起きてるの？）」

綾姫は変わり果てた貴志に驚いた。

その時、わずかな冷氣と共に綾姫の後ろに氷室龍夜が現れた。

「これは、能力の暴走だな」

「能力の暴走！？」

綾姫は後ろを振り返り、氷室龍夜に聞いた。

「助ける方法は三つ。

一つはこいつを気絶させる事。

二つ目は自分の理性で押さえる。

最後に、こいつを殺すこと。

それ以外に助ける方法はない。

だが、理性で押さえるのは素人には不可能だな。

殺しもはぶくとすると、残ったのはこいつを気絶させること。
だが、いまのこいつを気絶させることがお前に出来るか？」

「あんたも見えてないで協力してよ！」

「やだ。」

なぜ俺がお前の手助けをしなきゃならないんだ？

まあ、百万払うなら協力してやっても良いがな」

「…（今のあたしに貴志君を気絶させることが出来るのかしら。
氷室龍夜は協力してくれないし。」

体術では明らかに貴志君の方が強いわ…

さて、どうしたものかしら」

綾姫は今の状態を冷静に分析して、打開策を探した。

第五話 恭子姉さん

「やるしかないわね…！」

綾姫は腰から剣を抜いて覚悟を決めた。

「まあ、頑張るんだな。

百万払うならいつでも協力してやるよ」

後ろにいる氷室龍夜は無償で助ける気など全くないようだ。

「あんたの力は借りないわ！

おとなしくそこで見てなさい！」

綾姫は後ろを振り返らず貴志に向かって叫んだ。

「貴志君！あんたの相手はあたしよっ！」

その声により、今まで殴り続けていた犯罪者から離れて綾姫を視界にとらえた。

「ガアアアア！」

「ははははは、もはや人間じゃねえな。
あんな化け物を助けるのか？」

氷室龍夜は貴志をみて軽く笑った。

「黙ってなさい！」

久しぶりの同志なの！

実力もまだまだあがるし、戦力になるから助けていの」

「なら戦力にならないような雑魚だったら見捨てた、ということだな？」

氷室龍夜は綾姫をからかう。

「いちいちうるさい男ね。

弱いやつでも助けるわよ！

いいからあんたは黙ってなさい」

「はいはい」

氷室龍夜はふざけて返事をする。

のそのそと歩み寄ってくる貴志を前に剣を構えるが、綾姫はそこで一つ疑問に思った。

「あ、この剣で切ったら貴志君はどうなっちゃうのかしら？」

「俺は黙ってなきゃいけないんだろ？」

「良いのよっ！

それより、教えてよ！」

「五万」

氷室龍夜は手のひらを差し出して綾姫にお金をせがむ。

「わかったわよ！
払うから教えて！」

綾姫はしぶしぶながら交渉をのんだ。

「先払い」

氷室龍夜は不気味な笑みを見せながら綾姫に言った。

「…あんたム力つくわね。
まあいいわ、はい約束の五万円」

綾姫はズボンのポケットから財布を取りだし、そこから五万円を氷室龍夜に手渡した。

「よし、なら教えてやろう。
その剣であいつを切ったらあいつの膨れ上がった筋肉が消え失せる。
最悪の場合、二度と能力が使えなくなる可能性がある。
つまり、お前は剣を使わずにあいつを気絶させなければならない、
ということだ」

「…聞いたって良かったわ」

綾姫は心の底からそう思った。

「やってやろうじゃないの！」

綾姫は剣を鞘に戻し、貴志をみた。

「ガアアアア！」

貴志はのそのそと歩み寄ってくる。

二人の距離は五メートル程。

「でりゃあああ！」

綾姫は握りこぶしをつくって貴志に向かって走り出した。

そして殴りかかろうとしたが、綾姫の腕の距離より遥かに長い貴志の腕が先に綾姫の右肩をとらえた。

「きゃああつ！」

綾姫は右肩を押さえながら立ち上がる。

「リーチが長いわね。

なんとか腕の間を潜り抜けなくちゃ」

二度目の挑戦。

綾姫は貴志に向かって走りだした。

貴志は綾姫に殴りかかるが、ギリギリの所でかわされる。

綾姫は貴志の懐へ入り込んでみぞおちに全力のパンチを放った。

「グガッ！」

「どうやらダメージは与えられたみたいね」

綾姫は安心して額の汗を拭^{ぬぐ}った。

そして油断していた綾姫に貴志のカウンターが決められた。

「バーカ。

油断してんじゃないよ」

氷室龍夜は冷たく言い放った。

「うるさいわね。

黙ってみてるか、手助けしてちょうだい」

「わかったよ。

黙ってみてやる」

綾姫はさっきより強く拳を握りしめ、貴志に殴りかかった。

しかし、貴志の攻撃速度はさっきより格段に早くなっていて綾姫の身体を強いパンチが与えられた。

「うああっ」

綾姫は後ろへ飛ばされる。

「強い…さっきよりスピードがあがってる」

「相手も本気になったってことだろうな。

どうやらお前の一撃であいつを怒らせちゃったみたいだぜ」

氷室龍夜は冷静に分析する。

「やはり体術では相手の方が有利ね。
でも、場数だったらあたしの方が有利！
キャリアの違いってものを見せてあげるわ！」

綾姫は俊敏な動きで貴志の高速のパンチをギリギリでかわし、隙を狙って的確に攻撃を繰り返した。

一発の攻撃はそれほど強くは同じ箇所へ何度も攻撃することによって痛みを倍増させる。

「トドメだああああ」

綾姫は叫び声と共にジャンプして貴志の顔面にパンチをお見舞いした。

ズシーンと音をたてて倒れた貴志。

「…はあ、はあ…どうよ」

綾姫は後ろを振り返り黙って見物している氷室龍夜を見た。

「…後ろ」

氷室龍夜は綾姫の指をさした。

「え…？」

嘘でしょ…？」

綾姫が振り返った先にはほとんど無傷の貴志がたっていた。

「ガアアアアア！」

綾姫は絶望し、その場に膝を落とした。

「まったく、しょうがねえ小娘だ。

一度だけお前を助けてやる。

今から言う条件を守るならな」

氷室龍夜は崩れ落ちた綾姫に語りかける。

「俺のことを追いかけないと約束しろ。

俺は追われるのは嫌いなんでな。

どうする？」

「…わかったわ、その条件…のんであげる」

綾姫は少し考えたが結論をだした。

「商談成立」

氷室龍夜はゆっくりと貴志に歩み寄る。

「ガアアアアア！」

「黙れ」

氷室龍夜は手のひらの上で氷の球体を作り出し、右から左へと手を動かしてそれを貴志の顔面に投げつけた。

「ギャ…」

貴志は一撃で気絶した。

「あとはベットに横にさせとけば治るだろ。
お前はこいつに能力の制御をちゃんと教えとけ」

氷室龍夜はそれだけを言い残し歩き去ろうとしたが綾姫が呼び止めた。

「待つて！」

「なんだ？」

氷室龍夜は振り向かず、足だけを止めた。

「あ、ありがとう」

綾姫は照れくさそうに言う。

「俺はお前達みたいなやつらに追われたくないから助けてやってただけだ」

「それでも！

あたしを…貴志くんを助けてくれたのは事実だから！
だから、ありがとう」

「…調子狂うぜ」

氷室龍夜は一枚の紙を取りだし、綾姫に向かって投げた。

「なに…これ？」

氷室龍夜からもらった紙には十一桁の数字が書かれていた。

「俺の携帯の番号だ。」

どうしても俺の力が必要になったときに連絡しろ。
一回1万円で手助けしてやるよ」

「あ、ありがとう」

「無駄に連絡してくんじゃねえぞ？
どうしても俺の力が必要になったときだけにしろ。
じゃあな」

氷室龍夜は地面に細い氷の道をつくって滑っていった。

「…優しいところあるじゃない、龍夜。
べ、別に惚れたわけじゃないんだから…！」

綾姫は一人で顔を真っ赤にしながらしゃべっていた。

………

………

…

「うつ、うつ…は………？」

総司令室のベットに横になっていた貴志はそんな声をあげながら身体をゆっくりとおこした。

「総司令室よ。」

なにが起きたのか覚えてる？」

綾姫は目をさました貴志に優しく訊ねた。

「事件があつて…」

犯人と格闘をして…

……あ！

もももも、申し訳ありませんでした！
理性がきかなくなつてしまい…」

どうやら覚えているようだ。

「良いのよ、別に」

「で、でも…」

貴志は申し訳なさそうに謝ろうとするが綾姫がそれを制止させる。

「あたしも初めて見た症状だったからね。」

でも、結果的に別にたいした傷があるわけでもないし。
そんなに気を使わなくて大丈夫よ」

「…わかりました、綾姫さんがそう言うなら。」

あ、それと…僕を助けてくれた男の人は誰ですか？」

「ん？」

ああ、龍夜のことね。

あいつは…」

綾姫は龍夜との関係を説明するのに適切な表現を探した。

「彼氏…とか？」

貴志は訊ねた。

「な、なに言ってるのよっ！

そそそ、そんなことあるわけじゃないっ！

あ、あたしとあいつは…て、敵同士というかなんというか」

綾姫は貴志の一言で明らかに動揺した。

「その人の事、好きなんですね？」

貴志は確信にせまった。

「い、いや…別に好きってわけじゃ…

まだ、会ったばかりだし」

「ははは、冷静でカッコいい綾姫さんのそういう表情…かわいいと思いますよ」

「ふふ、ありがとう」

二人はお互いの顔を見ながら笑いあった。

そこへノックもなしに部屋に入ってきた女性。

「…なになに？」

二人つてもうそんなに仲良くなってたの？

もしかして恋人同士とか？」

さつきだった。

「違うわよ！」

「違います！」

綾姫と貴志は声を揃えて否定した。

「冗談よ、そんなにムキにならなくても良いじゃん」

さつきはそう言って微笑んだ。

「さつきは今、仕事終わったの？」

「そうよ。」

あ、それから…

恭子姉きんこさんが今日帰ってくるらしいわ。

さつき連絡が来てね」

「え！？

恭子姉さんが？」

「……あの、恭子姉さんって？」

貴志は聞き覚えのない名前で盛り上がる二人に訊ねた。

「あ、恭子姉さんっていうのは…あたし達の先輩でね。とっても強いだよ。」

それに超がつくほどの美人だし。血は繋がってないけど、あたし達のお姉さんみたいな人だからそう呼んでるだけ。

ある事件を捜査してて世界中を飛び回ってるって聞いたけど…」

「そんな方なんですか…
なんか楽しみですネ」

「あ、もしかして美人ってところに反応したでしょ？」

「いや、そうじゃなくて…
あの…」

貴志はもじもじしてしまった。

「さつき、あんまりからかわないの。
で、いつ頃着くとかは聞いてないの？」

綾姫は貴志をからかうさつきに注意をした。

「いや、今日来るとしか言ってなかったよ。
詳しい話はあたしも聞いてないし。
すぐに電話切られちゃったからね」

「そっか」。

でも、恭子姉さんに会ったのってホントに久しぶりよね。
何年ぶりくらいかな？」

「あたしも詳しくは覚えてないけど、だいたい五年ぶりくらいかな？」

綾姫とさつきは二人で記憶を振り返るが、思い出せなかった。

その話についていけず、取り残された貴志はひたすら黙り込んで二人を見ていた。

そんな時、不意にドアが開かれた。

「総司令官、久しぶり…って！
綾？それにさつきも」

黒い髪を肩までたらし、露出度高めの洋服を着こなしている絶世の美女がそこに現れた。

「恭子姉さん！？」

綾姫とさつきは声を揃えて言った。

「久しぶり」

で、総司令官は？
散歩にでも行ったの？」

恭子姉さんと呼ばれた女性はそこにいるはずの人間がいらないことに
気付き、綾姫とさつきに訊ねた。

「あゝ、実はですね」

綾姫は自分が総司令官になったことを丁寧に説明した。

「あははは、そうだったの〜
まああの人らしいね。」

それと、しばらくはここにいることになると思うから、よろしくね
」

恭子は悩殺スマイルを綾姫とさつきに放った。

「ヤバい、女のあたしも虜になっちゃいそうだったわ…」

綾姫は小声でつぶやいた。

「久しぶりに見た恭子姉さんの悩殺スマイルはかなりヤバいね」

さつきも小声でつぶやいた。

「……………」

貴志は恭子に視線が釘付けになり、ポカーンとしていた。

開いた口が塞がらないとはこういうことを言うのだろうか…？

「あ、そうそう。」

あたしね、人を探してるんだけど知らない？」

恭子はあることを思い出して綾姫とさつきに訊ねた。

「氷室龍夜っていうんだけど、知らない？」

ポケットから取り出した氷室龍夜の写真を見せながら恭子は二人に訊ねた。

「氷室龍夜！？」

一応知っていますが、なぜ龍夜を探してるんですか？」

綾姫は恭子に質問を投げ掛けた。

「彼を殺すために、ね」

恭子は即答した。

「え…？」

綾姫もさつきも貴志も、恭子が言った言葉をすぐには理解できなかった。

第六話 氷室龍夜の實力

「恭子姉さん？」

龍夜を殺すって…どういことなんでしょうか……？」

綾姫はなぜ龍夜が殺されなくちゃいけないのか、訊ねた。

「あら？」

ずいぶん親しい感じ？」

氷室龍夜とどんな関係なの？」

恭子は綾姫に訊ねた。

「龍夜には、危ないところを助けてもらったりしました」

綾姫は龍夜の良いところを述べた。

「氷室龍夜が…人を助けた…？
誰かと勘違いしてない？」

恭子はかなり驚いて綾姫に人違いじゃないか、と訊ねた。

「確かに、氷室龍夜って名乗りましたよ。
マスターアビリターということも聞きましたし」

「信じられないわ…！」

絶対零度の風を身に纏い、人を殺すことに一瞬の躊躇いも見せない
冷徹な悪魔。

触れることは愚か、近づくことさえ叶わない。

それが、あたしの知ってる氷室龍夜っていう男よ」

「……………」

三人は言葉をなくした。

「彼はあたしの両親を平気で殺したのよ。誰かを助けるなんて考えられないけど…」

「…そんな……！」

綾姫は絶句するしかなかった。

「とにかく、あたしの知ってる氷室龍夜とあなた達の知ってる氷室龍夜は全くの別人みたい、ってことね。まあ、会えば全ての疑問が解決するわね」

恭子は話をまとめて、微笑んだ。

「綾、氷室龍夜の連絡先知らない？」

「え、知ってますけど…」

「知ってるけど、教えたくない？あたしと氷室龍夜が戦うことが嫌なの？」

「…うん、うん」

恭子は綾姫の心情を的確に言い当てた。

「なら……綾はあたしについてきてちょうだい。
氷室龍夜が敵意を向けてあたしに攻撃を仕掛けたらこちらも反撃する。」

綾はただ見てるだけでいいわ。
これならどう？」

「それなら、良いですよ。」

龍夜が攻撃を仕掛けてくるまで恭子姉さんが攻撃しないで……くれるなら」

「よし、決まりね。」

じゃあさっそく連絡してもらえるかしら？」

「は、はい」

綾姫は龍夜からもらった携帯の番号が書いてある紙をポケットから取り出し、自分の携帯のアドレスに登録してから電話をかけた。

「龍夜だ」

電話をかけて数秒、そんな言葉が電話の向こうから聞こえた。

「あたし、白木綾姫だけど。」

あんたに会いたいっていう人がいるんだけど……」

「俺に……？」

なんのようだ？

くだらん用事なら遠慮させてもらっ」

「あんたを……殺すために。」

って言われたんだけど」

「俺を殺す？」

そいつの名前は？」

強いのか？弱いのか？」

龍夜は疑問を一気に投げ掛けた。

「名前は、霧島恭子さん。きりしま

あたしより遥かに強い人よ。

ちなみに、あたしの先輩」

「霧島恭子？」

……わかった。

何時にどこに行けばいいんだ？」

「ちょっとまって、今聞くから」

綾姫は受話器を軽く押さえ、恭子を見た。

「恭子姉さん、何時にどこに行けばいい？って聞かれましたが……」

「そうね……」

なら、今すぐこの建物の裏にある大きな広場に来るように伝えて」

綾姫は恭子から場所を聞くと受話器の向こうにいる龍夜にしゃべりかけた。

「あのね、この建物の場所はわかるわよね？」

「もちろん」

「なら、今すぐにこの建物の裏にある大きな広場に来て」

「ああ、あそこか。」

「わかった、すぐに向かう」

そう言って電話をきられた。

「彼、来るって？」

恭子は受話器を置いた綾姫に聞いた。

「はい、すぐに来るらしいです」

「よし、じゃあ行きましょうか」

恭子と綾姫は建物を出ていった。

「なんか、すごいことになりそうだわ」

取り残されたさつきは貴志を見ながらそうつぶやいた。

「恭子さんは強いって綾姫さんが言っていました、龍夜さんも強いんですね？」

貴志はさつきに訊ねた。

「まあいくら恭子姉さんでも、マスターアビリターを相手にするとなると…」

恭子姉さんが本気で戦っていると見たことないけど、氷室龍夜には多分勝てないわ」

さつきは冷静に分析する。

「マスターアビリター？」

貴志は知らない単語を聞き返す。

「マスターアビリターっていうのは……」

さつきは貴志に丁寧に説明した。

「……あの人、そんなに強い人だったんですか」

「まあ、あたし達は二人の帰りを待つしかないわね。

事件が発生したら貴志くんはあたしと一緒に現場に行ってもらうことになるけどね」

「なんであなたの方が早いなのよ」

待ち合わせ場所についた恭子は自分より早く到着していた龍夜に少し驚いた。

「たまたま近くにいたんでな」

「あらそう。

で、あたしのことはわかる？」

なぜあなたを殺そうとするのか」

「ああ、わかってる。

四年前の事件の被害者の親族、霧島恭子だな」

「調べたのね？

あの事件のこと、少しは悪かったって思っているのかしら？」

「思ってるさ。

決して許されることじゃないってこともな。

俺を憎んでるなら俺をボコボコにすればいい。

それで気が済むなら、俺は無抵抗のままお前に殴られてやるさ」

「殴っただけであたしの気が済むわけないでしょ！？」

あなたはいつたいどれほどの人間を殺したと思ってるの！？」

あたしの両親以外にも、何万人という無関係の人たちを殺したのよ？
そんな簡単に済まされないことはあなたもわかってるんでしょ！？」

恭子は怒りと悲しみと恨みをいり混ぜた表情で龍夜を怒鳴りつけた。

「ならどうすればいい？」

俺が死んだって被害者の家族は気休めにしかない。

俺は被害者の親族につぐないをするために謝りに行ったさ。

何度も何度も頭を下げ、殴られ、お金を払ったり。

それで許してもらえたなんて思っちゃいないが、せめてものつぐないとしてもう二度と誰も殺さないと決めた。

俺はお前にどんなつぐないをすればいい……？」

氷室龍夜は今までに見たこともないくらい真剣な表情で恭子を見つめた。

「…あなた、大変だったのね。」

なら、あたしと手加減なしの勝負をして！

あたしもストレス発散したいし、久しぶりにとんでもなく強いやつに出会えたから、手合わせ願いたいわ」

「…わかった。」

だが、本気でやったらあんた死ぬかもしれないぞ？

ちよつとは加減した方がいいんじゃないか？」

「あたしをあまく見ないでちょうだい。」

それでも、あなた相手になかなかいい勝負が出来ると思うわ。

それに、あなたの決意が本物ならあたしを殺すことはないだろうからね」

「ふっ…」

なら始めるか。

かかってこい、手加減抜きで相手してやる」

氷室龍夜は恭子に言い放った。

「あたしとの勝負であなたはいつまで余裕でいられるかしら」

恭子は目にも止まらぬ速さで移動し、氷室龍夜の腹をぶん殴った。

「……（速い！かなりの間合いがあったはずだが、刹那の間に俺の目の前にいやがった…！

だが、反応できない速さじゃない）」

「……（恭子姉さん、あたしとの約束忘れてるし）」

綾姫はため息をはいて、二人の勝負を見届けることにした。

「さすがはマスターアビリター。」

あたしの速度に反応して水の壁をはって威力をさげるとはね」

「……（何が起きたのかさっぱりわからないわ）」

綾姫には二人の一瞬の出来事を理解することは出来なかった。

「お前、雷の能力者だな？」

龍夜はさっきの一瞬の出来事から、恭子の能力を言い当てた。

「う」名答。

でも、話しているほど余裕はないと思うけど？」

恭子が言葉を言い終える前に四方八方から雷が龍夜目掛けてとんできた。

「ぐあああああああ」

龍夜は無数の雷に打たれ、叫び声をあげた。

「もっと本気で戦いなさい！」

それとも、マスターアビリターとも呼ばれた男はこの程度の実力なの？」

「お前の力がどれくらいなのか、様子を見ていただけだ。」

あんまり弱すぎて、俺の一撃で死んでもらうわけにはいかないから

な」

「その減らず口がいつまで続くかしらね！」

恭子は目にも止まらぬ速さで龍夜を翻弄する。

「次は俺の番だ」

龍夜はそつつぶやき、水しぶきを辺り一面に振り撒いた。

「……（ただ水を振り撒いただけ…？

彼はなにをたくらんでるの？）」

「……（水よ…冷気をまとい固体へ変われ）」

龍夜の言葉で振り撒かれた水は一瞬で凍りついた。

恭子の身体についた水滴も一滴残らず氷へと変化し、恭子の体温を奪う。

「……（くっ！身体に完全にくっついていて、はがせない。
寒さのせいで動きが鈍る…！」

「……（我が水的能力よ…大いなる波にてやつを飲み込め）」

氷室龍夜の前方から巨大な水の波が発生し、恭子の身体と共に地面を水浸しにした。

「……（ヤバい！これを氷に変えられてしまったら……！）」

恭子が龍夜に突撃するが、わずかに早く龍夜の詠唱が終わる。

「……（大地よ…我が水的能力にてその身を氷へと変えろ）」

辺り一面が氷に包まれた。

恭子の身体は首からしたが完全に凍りついていた。

「……（大いなる水よ…天空から降り注げ）」

突如、恭子の頭上に巨大な水の球が出現した。

「こんなのまともにくらったらひとたまりもないわね」

恭子は凍りついて動けない身体に絶望して、避けることをあきらめてそうつぶやいた。

頭上の巨大な水の球は高速で、容赦なく恭子の身体を飲み込んだ。

「あああ！」

恭子の叫び声は水にかき消された。

水の球体が地面に衝突すると、地面にへこみを作った。

そのへこみの中心に恭子は倒れていた。

恭子を包んでいた氷はさっきの衝撃で砕け散っていた。

龍夜はへこんでいない地面から恭子の姿を見下ろした。

「……あなた、強すぎよ。
レベルが…違いすぎた……わ」

恭子はゆっくりと立ち上がった。

「あれをくらってまだ立てるほどの体力があるとはな。
普通のやつなら死んでいたか、一ヶ月は目をさまさないほどの威力
なんだぞ？」

龍夜は恭子の驚異的なまでの耐久力に驚きを隠せない。

「ふふ…それは…お褒めの言葉…として……受け取って…おくわ」

恭子はそれだけ言ってその場にしゃがみこんだ。

龍夜は恭子のもとへ歩み寄っていく。

「これで俺はお前につぐないをすることが出来たのか？」

「充分よ、あたし…久しぶりに…楽しめたし…
これからは…もっと多くの…人に…つぐないを…しなきゃね」

「どつという意味だ？」

龍夜は恭子が放った言葉の意味を理解できなかった。

「あなたは…あたし達の仲間…加わってもらっわ…
あたし達の…仲間になって…人を救うことで…たくさんの…遺族達
に…つぐないが…出来るでしょ？」

せつかく…そんな強大な…力を…手に入れたんだから…誰かのために…使っても…いいんじゃない？」

「そういうことか」

龍夜は恭子のさっきの言葉の意味を完全に理解した。

「もちろん…給料は…払うわ」

「了解だ。」

丁度、俺も暇だったしな」

「ちよつとちよつと！」

なんで勝手に決めちゃうの？

そういうのは総司令官であるあたしに言ってもらわなきゃ」

いつの間にか二人のもとへ歩み寄っていた綾姫が話に割り込んできた。

「さっき気が付いたんだけど、恭子姉さんよりあたしの方が立場は上なんだからね？」

すっかり敬語とか使っちゃってたけど」

「龍夜君が…あたし達の…仲間になるのが…いやなの？」

綾、龍夜君のこと…好きなんですよ？」

恭子の言葉のあとに、ボンツと音がして綾姫の顔は真っ赤になる。

「ん？そうなのか？」

龍夜はなんの躊躇^{ためら}いもなく綾姫に訊ねた。

「な、な、なに言ってんのよおおお！
そ、そ、そんなわけじゃない！」

綾姫の顔はますます赤くなる。

「ははははは、リンゴみたいだぞ、綾姫？」

龍夜は初めて綾姫の事を名前で呼んだ。

「この、バカやろおおおお！！！」

綾姫の叫び声は遙^{かなた}か彼方まで響き渡った。

第七話 坂下佳奈

「というわけで今日からお前達の仲間に加わるようになった、氷室龍夜だ。

ま、よろしく頼むぜ」

龍夜は総司令官室に綾姫と恭子と共にやってきて、さつきと貴志に仲間になった経緯いきさつを話した。

「なんでそんなに偉そうなの…?」

さつきは龍夜には聞こえない音量でボソッとつぶやいた。

「よ、よろしくお願いします」

貴志は素直にうなづいた。

「恭子姉さんを休ませてあげなきゃ」

綾姫は言いながら自分のベットに恭子を寝かせた。

「よろしくね、龍夜」

さつきはちょっと遅れて龍夜を迎えた。

「馴れ馴れしいぞ、龍夜様と呼べ」

龍夜は冗談混じりにさつきに言い放った。

「一応あたしは龍夜の上司なのよ。

むしろ龍夜があたしのことをさつき様と呼ぶべきだわ」

さつきも冗談混じりに龍夜に言った。

「死んでもごめんだ」

龍夜は軽く笑った。

それにつられてさつきも笑った。

「あたし、散歩してくる！」

綾姫はなぜか機嫌を損ねて、部屋を出ていこうとするがさつきが引き留めた。

「あれ？もしかして嫉妬してる？」

「し、してないわよ！」

綾姫はそう言って部屋から出て行ってしまった。

「あらら、嫉妬しちゃったみたいだね」

さつきはそうつぶやいた。

「つくづく面白いやつだな。
からかいがある」

龍夜は無邪気に微笑んだ。

「なんだかあたし達、気が合いそうね」

さつきは龍夜に微笑んだ。

「そうだな」

龍夜はそう言っただけで綾姫の席に座った。

「綾姫は偉いやつだ、って言われてもなんかパツとしないのは俺だけか？」

「あたしもそれは思うわ。」

なんか上司って感じしないのよね」

さつきは龍夜の意見に同意した。

「僕は綾姫さんは素晴らしい人だと思ってますよ」

「お前には聞いてない」

「貴志には聞いてない」

龍夜とさつきは声を揃えて貴志に言った。

貴志はうつむいていじけてしまった。

「ま、退屈はしなさそうだな」

龍夜は笑いながらそう言った。

「あ、そうだ。

あたしの名前は河上^{かわかみ}さつき、呼び方はさつきでいいわ」

「ああ、そう呼ばせてもらう」

「あ、僕の名前は岩瀬貴志です」

「聞いてねえ」

龍夜は自己紹介をした貴志に言い捨てた。

「……（そんなに冷たくしなくても……）」

貴志はいじけた。

「まったく、なんなのよ！

さつきったらすっかり龍夜と仲良くなっちゃって！」

綾姫はズカズカと音をたてながら散歩をしていた。

「うわあああ！」

綾姫の近くで誰かの叫び声が聞こえた。

「なに？事件かしら？」

綾姫は一目散に走り去っていく人の群れを見てつぶやいた。

「ははははは！
ひれ伏せ！」

どうやら能力者の仕業らしい。

犯人はかなり近くにいて、周りにはかなりの数の人達が倒れている。

犯人に近づけば近づくほど身体が重くなる。

「重力の能力者？」

綾姫は重くなった身体を必死に動かし犯人に近づいて話しかけた。

「あ？お前はなんで俺様にひれ伏さないんだ？

…まさか、お前も能力者か！」

「能力者犯罪捜査組織総司令官、白木綾姫よ。
あんたを逮捕してあげる」

綾姫は腰から剣を抜いて戦闘体制にはいった。

「面白い！俺様の力を思い知らせてやる」

綾姫にかかる重力がさらに多くなる。

「…くっ、身体が重い…！」

「太ったのか？」

不意に背後から声をかけられた。

「ち、違うわよ！

あいつの能力のせいよ！

つて、龍夜！？」

綾姫は首だけを後ろを向け、背後の人物を見た。

「俺はなんともねえし。

やっぱり太ったんだな？

ダイエットしろよ」

龍夜は綾姫を軽く笑い、からかった。

「あんたはマスターアビリターだから、能力の恩恵が多いだけよ！」

「そんなことはわかってる。

冗談を本気にするな」

「で、あんたは何しに来たの？

あたしを笑いに來たの？」

綾姫はおもいつきり龍夜をにらんだ。

「助けに來た」

「はあ？

なんであんたがあたしを助けるの？

あ、お金なら払わないからね？」

「仲間を助けるのに理由なんているのか？」

「え…？」

綾姫は龍夜の口から仲間なんて言葉が聞けるなんて思ってなかった
ので、龍夜の言葉にすごく驚いた。

「お前は黙って見てろ」

龍夜はそう言って犯人の男に向かって地面を凍らせて、その地面を
滑っていった。

「な、なんだお前！
なぜ俺の重力の影響を受けないんだ！？」

犯人の男は自分に向かってくる龍夜に驚き、さらに重力をあげるが
龍夜には全く影響がない。

「俺が強いからだ」

龍夜は男の目の前までやってきてからそう言い放ち、男の顔面をぶ
ん殴った。

「ふっ、お前ごときに能力を使うなんてもったいない」

男はそのまま気絶し、周りにかかっていた重力はもとに戻った。

「あとは綾姫の仕事だ。
俺はお前の部屋に戻る」

それだけ言い残して龍夜は自分が滑る分だけ地面を凍らして滑って

いった。

「…カッコいいじゃない、龍夜」

綾姫は龍夜の姿が見えなくなっしてから一人でつぶやいた。

………

………

…

「あんた達〜！」

総司令官室へ戻ってきた綾姫を迎えたのは貴志、さつき、龍夜、恭子だった。

「ここはあたしの部屋なのよ？

さつきは自分の部屋があるでしょ？

恭子姉さんも怪我が治ったんだったら自分の部屋に戻りなさい。

貴志くんはここにいても良いわ。

龍夜は今から部屋へ案内するから！

あんた達のおかげであたしのくつろぐ場所がないじゃない！」

綾姫は自分の部屋でくつろいでいる仲間達を叱しかった。

「そんな冷たいこと言わないでよ、綾。

あたし達は親友でしょ？」

さつきは反抗した。

「親しき仲にも礼儀あり！」

綾姫はさつきを部屋から追い出した。

「あたしはまだ完治したわけじゃないから良いでしょ？」

恭子も反抗した。

「ある程度は動けるようになったんでしょ？
だったら自分の部屋で休みなさい」

綾姫は恭子も部屋から追い出した。

「早く俺の部屋とやらの案内しろ。
こんな、お前の匂いが染み付いた部屋に居たら俺の身体が腐くさっちゃう
いそうだ」

龍夜は綾姫に喧嘩けんかを売った。

「そこまで言わなくても良いでしょ！？
だったらなんで今までここにいたのよ！」

「楽しそうだったから」

龍夜は無邪気に笑った。

「……はあ、じゃあ案内するからついてきて」

綾姫は龍夜を連れて部屋を出た。

「…（まったく、たまにカッコいい姿を見せたと思ったらこれなんだから）」

龍夜の部屋は総司令官室のすぐ近くだ。

「お前の部屋と随分近い所だな」

「ここと、向かいの部屋しかあいてないの。近いからって寝込みとか襲わないでよ？」

「お前の身体などまったく興味ない。余計な心配はするな」

龍夜はまた綾姫に喧嘩を売った。

「わかったわよ！

良いからここでゆっくりしてなさい！」

綾姫は龍夜を部屋にいれてドアを閉めた。

「ふう…

やっとくつろげるわ」

総司令官室に戻ってきた綾姫はベットに横になった。

「あ、そうだ。

いつまでもあたしの部屋にいるってのは困るわね。貴志くんにも部屋を与えるわ、ついてきて」

「はい」

貴志の部屋は龍夜の向かい側。

「仕事がいったときは連絡するから、それまではゆっくりしててちょうだい」

綾姫はそう言い残して総司令官室に戻った。

それぞれの部屋には料理を作る場所もあるし、トイレも風呂もある。ベットがある部屋は少ないが、さっきのメンバーの部屋には全て置いてある。

内線電話は全ての部屋に置いてあり、総司令官室で仕事の連絡がはいつたときに各部屋へ連絡できるようになっている。

「部屋を増やさないとダメね。
相部屋にすればまだまだはいるわね」

綾姫はこれから人が入社したときのために部屋割りをちょっと考えていた。

「……うちの支部は人が少ないのよね」

能力者犯罪捜査組織は都道府県ごとにわかれていて、総計47社ある。

そのなかでも、千葉県チバの能力者犯罪捜査組織は人手不足に悩まされている。

原因は多分、綾姫のおじいちゃんである。

仕事に厳しく、訓練に厳しくがおじいちゃんの教えだったからだ。

あまりの厳しさで辞めていく人間が増えてしまったのだ。

「募集しなきゃね」

綾姫はポスターを書いて、人を募集しようと考えた。

綾姫がポスターを書きはじめた時、プルルルルと音をたてて電話が鳴り響いた。

「はい、こちら能力者犯罪捜査組織です。

はい、はい、わかりました」

「…（今は仕事よりポスター仕上げなくちゃいけないから他の人にやってもらおう）」

綾姫は内線電話を使ってさつきに連絡した。

「なに、綾？」

「仕事の連絡がはいつたの。行ってきたもらえる？」

「あいてて！急にお腹が痛くなつた！」

「演技は良いから、頼むわ。」

あたし、ポスター書かなきゃいけないの」

「ポスター？」

「うん、人を募集しようと思って」

「そっか、人手不足だもんね。
わかったわ、どこで事件？」

さつきは素直に納得して事件の詳細を聞いた。

綾姫はさつきに事件の詳細を丁寧に話した。

「オッケー、じゃあ行ってくるわ」

そう言って電話はきれた。

「さて、あたしはポスター書かなきゃね」

綾姫はまたポスター作りに励んだ。^{はげ}

……

……

…

「よし、完成！」

あとはこれを印刷していたところに貼るだけだわ」

綾姫は完成したポスターを印刷機にのせ、大量に印刷した。

印刷された大量のポスターを持って綾姫は建物から出ていった。

綾姫が留守の時に電話が来たら困るので、恭子の部屋の電話に転送されるようにセットすることも忘れずにやった。

「お出掛けですか、綾姫さん」

見張り役の女性に声をかけられた。

「あ、あんたも手伝ってちょうだい。
これを町中に貼るのよ、わかった？」

綾姫はポスターを半分にかけて、特殊な加工がされたセロハンテープと一緒に見張り役の女性に渡した。

特殊な加工がされたセロハンテープとは、貼った者が剥がさない限り絶対に剥がれることのないセロハンテープだ。

能力者犯罪捜査組織の本部にいる能力者が作って全国的能力者犯罪捜査組織の人達に配布したものである。

二人は別々の方向へ歩き出し、町中にポスターを貼って回った。

「ふう…」

終わった〜

「ご苦労様、ありがとね」

綾姫は建物の入り口で同じタイミングで帰ってきた見張り役の女性

に礼を言った。

「久しぶりに町を歩き回ったので楽しかったですよ。こちらこそありがとうございます」

見張り役の女性は軽くお辞儀をした。

「ところで、あんた名前何て言うの？」

綾姫は唐突に名前を聞いた。

「私の名前は坂下佳奈さかした かなと言います」

「佳奈か、良い名前じゃない。これからもよろしくね、佳奈」

綾姫は改めて挨拶をした。

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

佳奈も挨拶をした。

二人はしばらくの間、他愛ない世間話をした。

第八話 仲間

「綾、起きてよ！
外が大変よ！」

綾姫は誰かの叫び声で目をさました。

「やっと起きた。
早く外に来てちょうだい」

叫び声の主はさつきだった。

「なに…？
朝っぱらからそんなに慌てて…」

綾姫は眠たそうにしていたがそんなのはお構い無しにさつきは綾姫を連れて外へ出た。

「な、なによ！
なんでこんなに人が集まってるの？」

建物の入り口から外を見た綾姫は驚きの声をあげた。

そこには、子供から大人まで、老若男女問わず人が50人ほど集まっていた。

「どうやら綾姫が貼ったポスターを見て集まってきたらしいのよ。
早く対処してあげてよ、こういうことは総司令官の仕事でしょ？」

そう言つてさつきは自分の部屋に戻つていった。

「あの…」

もしかしてみなさんはポスターを見て、集まつたんですか？」

綾姫はまず、全員に確認した。

「はい」

みんなは声を揃えて肯定した。

「ということはみなさんは全員、能力者なんですね？」

またしても綾姫はみんなに確認した。

「はい」

当然のようにみんなは肯定した。

「わかつたわ。」

じゃあ今からみなさんに仕事の内容と、やる気があるかどうか一人一人面接するので並んでついてきてください」

綾姫は総司令官室までの廊下にみんなを並ばせ、総司令官室で一人一人面接した。

仕事の内容を詳しく話して、それでもやる気のある人間は即採用して行つたん家に帰ってもらい、翌日にまたここへ来るようにいった。子供でもやる気のある人間は即採用。

しかし、子供は親との相談をしてから決めなければならないので後日、親と一緒に来るように言った。

さすがに老人は死なれたら困るので入社をお断りした。

約一時間程で全員の面接が終わり、綾姫はぐったりとベットに寝転んだ。

「なんの騒ぎだ、綾姫」

龍夜はノックもなしに部屋にはいつてきてベットに寝転んでいる綾姫に訊ねた。

綾姫が説明しようとする次から次へと社員が綾姫の部屋になだれ込んできた。

全社員、総勢30程があまり広いとも言えない総司令官室に集まったのでぎゅうぎゅう詰めになった。

「狭いわよ！」

説明するからいったん訓練場へ移動してちょうだい！」

綾姫の声で、社員達は訓練場へと向かっていった。

訓練場の場所を知らない貴志と龍夜は総司令官室に残った。

「あんた達はあたしについてきて。
訓練場まで案内するから」

綾姫は二人をつれて訓練場へ歩いていった。

……

……

…

「さて、いきなり本題なんだけど」

訓練場に集まった社員達を前にして綾姫はしゃべる。

「さっきの騒ぎはあたしが昨日貼った社員募集のポスターのおかげよ。

だから、さっきの人達は入社を希望した人達なの」

綾姫は丁寧に説明した。

やがて、全てを説明し終えた綾姫はこれからのことについてしゃべり始めた。

「で、あんた達は入社した社員達に戦い方や能力者という存在について教えてあげてちょうだい。

しばらくはベテランのあんた達の世話が必要はずだからね。

で、一人でも仕事を任せられるようになったら他の人の手伝いをするか、今まで通り、一人で仕事をしてちょうだい。

わかった？」

綾姫の問いに対して反論する者は誰もいなかった。

多分みんなはこう考えているのだろう。

新たな仲間を一人前にすれば自分の休める時間が増える、と。

「あたしの話はこれで終わりよ」

綾姫がそう言うともみんなは満足したように各自、部屋に帰っていった。

綾姫も総司令官室へ帰る。

「よし、明日には新入社員が来る。
あたしも気合い入れなきゃね」

綾姫は総司令官室のベットに座ってそう言った。

直後、部屋にさつきがはいつてきた。

「よ、綾。」

さつきの綾はなかなか総司令官らしかったよ」

「そう…?」

綾姫は嬉しそうな表情でさつきに聞き返す。

「そうだよ、まさに総司令官って感じだったわ」

「あはは、ありがとね」

「でもさ、まさかポスター貼っただけであんなに集まるとはね」

さつきは話を切り替えた。

「そうね、あたしも驚いたわ。

能力者っていきなり能力に目覚めるからさ、犯罪に手を染める人もいれば、周りから化け物呼ばわりされて隠れながら生活したりするひともいるのよね。

で、あのポスターによって隠れながら生活していた人達が集まってきた、って事なんだよね」

「そうね、まあ仲間が増えて良かったね。

あたし達も嬉しいわ。

そして、綾姫は働きすぎだから、週に2日くらいは休みなさいよ？綾が休みのときはあたしか恭子姉さんに頼めば綾のかわりになつてあげられるし」

「そうだね、あたしも休みが欲しいかも。

なら、みんなの勤務時間をずらして全ての社員に週2日の休みを与えようかしら」

「うん、それが良いね」

さつきは綾姫の意見に賛成した。

「あとは、明日…何人が入社するかって問題ね。

あたしの今日の面接で、ここでの仕事を本気でやるなら、明日のお昼にここに来てもらうように言っているの。

いったい何人減るのかしらね…

それに入社してから仕事の大変さを知って辞めてく人もいるはずだから…」

「今からそんなにマイナスに考えないの。
大丈夫よ、みんなを信じてあげて」

さつきは綾姫に微笑んだ。

「そうよね、ありがとう。」

さつきのおかげで、なんだか元気が出たわ」

綾姫もさつきに微笑んだ。

……翌日

「もうそろそろお昼ね」

綾姫は総司令官室で時計を見ながらつぶやいた。

さつき達は仕事で外出しており、総司令官室には綾姫しかいない。

「……（なんか緊張してきたわ）」

綾姫は高鳴る鼓動を必死に押さえて新入社員を待った。

コンコン

ノックの音のあとに佳奈の声がドアの向こうから聞こえた。

「綾姫さん、昨日の方達が来ました。
通しますか？」

「うん、通してちょうだい」

「はい、わかりました」

佳奈はドアを開けずに用件だけを伝えて去っていった。

やがてドアの向こうから大勢の足音が聞こえてきた。

「綾姫さん、つれてまいりました」

佳奈はドア越しにしゃべりかけた。

「入ってちょうだい」

綾姫の声と共に新入社員達はそろそろと総司令官室にはいつてきた。

「多いわね…」

ちよつと入りきりそうにないので訓練場に移動してちょうだい。

佳奈、みなさんを案内してあげて」

佳奈は先頭をきって新入社員達を訓練場へ案内していった。

「さて、あたしも行くとしますか」

綾姫も少し遅れて訓練場へ向かった。

その表情からは喜びの感情がみてとれた。

訓練場についた綾姫が見た光景はざっと30人程の新入社員だった。

初めて集まった時と比べると半分くらいになっていたが、それでも綾姫は嬉しそうだ。

「ここに集まったということはみなさんは仕事内容を知った上で、やる気を失わなかったという解釈をして構わないわね？」

綾姫は新入社員達に語りかけた。

綾姫の問いかけに全員がうなづいた。

「では、みなさんにはこれから能力について、能力者について勉強してもらおうわ。」

それから、先輩方とチームを組んでもらい仕事をやらせてもらうわ。

やがては一人で仕事を担当できるようになって欲しいの。

もちろん、そこまで行くのは簡単じゃないわ。

でも、一人で仕事を任せられるようになったら給料は比べ物にならないくらい上昇するので頑張ってください。

じゃあこれからみなさんの事を面倒見てくれる先輩の部屋に案内するわ」

綾姫は新入社員達の先頭に立ち、一人一人、違う部屋へ案内した。

「さて、これであたしの仕事は終わりね。

あとはみんなが面倒見てくれるはず。

あたしは貴志君の面倒を見なきゃいけないし」

綾姫は総司令官室で佳奈と一緒にいた。

「なんだか綾姫さん、嬉しそうな顔をしていますね」

佳奈は綾姫に微笑んだ。

「そりゃ嬉しいわ。」

これであたしにも休日が出るし、組織として立派になるから」

綾姫も微笑んだ。

「私達が話をすると微笑んでばかりですね」

佳奈は笑いながら言った。

「そうね、気が付かなかったけど。」

佳奈といるとなんだか楽しいわ」

「あたしも綾姫さんと一緒に話をしていると楽しいです」

二人はまた笑いあった。

「今度は女同士の禁断の恋？」

ドアをかすかに開けて除き込んでいたさつきは二人に言い放った。

「違うわよっ！」

綾姫はドアの向こうにいるさつきに言った。

「冗談よ、綾」

さつきは部屋に入ってきて綾姫のベットに腰かけた。

「部屋に人がいたでしょ？」

あれがさつきの担当する後輩よ」

「わかってるわよ。」

任せといて、すぐに一人前にしてあげるから」

さつきはガッツポーズをとりながら綾姫に言った。

「これからずっと相部屋になるけど女同士だから良いわよね？」

綾姫はさつきに問いかけた。

「問題ないよ、安心して」

さつきは笑顔で言い放つ。

「あ、部屋割りをちゃんと決めなきゃいけないわね。」

さつきの所は問題ないけど他の部屋では男女ごちゃ混ぜになっちゃ
つてるところもあるし。」

ねえ、さつき。」

部屋割り考えるの手伝ってもらえる？」

綾姫は両手を合わせてさつきにお願いをした。

「そりゃ大変ね。」

わかった、一緒に考えよう」

さつきは綾姫の願いを受け入れた。

「さつき確認したんだけど、比率は若干女性の方が多いのよ。」

男性が23人で女性が25人いるのよ。

あたしは総司令官室だから女性は24になるわね。
部屋の数はこの部屋を除いて20あるわ」

「うーん。

よし、部屋が丁度偶数だから男子と女子で半分ね。

一部屋あたり二人にすれば良さそうね。

余った人達は教えるのが上手い人とか強い人の部屋にいければ良いんじゃない？

で、同じ部屋の人同士でチームを組めば混乱もしいと思うし。
どう？これで良いかな？」

「……完璧よ。

すごいわね、さつき

じゃあ今すぐ新入社員達を別の部屋へ案内しなきゃ。
手伝ってもらえる？」

「わかったわ、あたしは女子を案内するから綾は男子を案内して」

「了解」

綾姫とさつきはそれぞれ新入社員達を別の部屋へ案内した。

余った男は龍夜の部屋にまとめた。

余った女は恭子の部屋にまとめた。

「終わったわね。

ありがとう、さつき」

「どういたしまして」

二人はそう言っただけで自分の部屋へ帰っていった。

やがて、仕事から帰ってきた社員達にさつきと決めた事を説明して、自分の担当する新入社員達と同じ部屋で休んでもらった。

担当する数が多い龍夜と恭子は愚痴をこぼしたが、そのぶん給料をあげるということで納得してもらった。

第九話 美由紀

「貴志くんは龍夜が担当することになったのよね」

綾姫は仕事の連絡が入っていつものように貴志を連れていこうとしたが担当が龍夜に変わった事を思い出した。

「さて、この仕事はさつきに任せようかな」

綾姫は内線電話でさつきに仕事を押し付けた。

「やっと総司令官らしくなってきたんだけど…
なんだか退屈ね…」

綾姫は仕事の電話が鳴ったら手のあいてる社員に仕事をやってもらっていたため、退屈だった。

「これじゃあたしは強くないし…
なにより、サボり癖がついちゃうわね…
どうしたものかしら…?」

綾姫が仕事をしてしまうと、仕事の連絡が入ったときに誰かに任せないといけない。

任された人間は綾姫と同じように退屈になってしまう。

なにか良い案は無いものか、と綾姫が考えているときに部屋をノックされた。

「綾姫さん、元総司令官が面会を申し込んできたのですが…」

声の主は佳奈だった。

「え？」

おじいちゃんが？

連れてきてちょうだい」

「もう来てるぞい」

綾姫の声と同時に老人の声が聞こえてドアが開かれた。

「久しぶりね」

綾姫は、何しに來たんだこの野郎、と言いたそうな目で元総司令官に挨拶した。

「そんなに怖い顔をしなくても良いじゃないか。

それがわざわざ様子を見に来てやった祖父に対する顔か？」

「勝手に出ていった人が言うセリフじゃないと思うけど？」

綾姫はおじいちゃんを軽くにらんだ。

「まったく、最近の若い娘達は…！」

年寄りにはもつと親切にするべきだと、わしは思う」

「で、なんで戻ってきたの？」

「色々あったのじゃよ…」

わしが実家に帰ると婆さんはわしに仕事をしろと怒鳴り付けて家から追い出され。

道行く若い娘達に声をかけたがことごとく無視され。
仕返しに尻を触ったら警察に通報されてしまったてな…
なんとか釈放されてここに戻ってきたのじゃよ」

「…あきれた。

じゃあおじいちゃんがまた総司令官やつてくれるの?」

綾姫は希望に満ちた瞳でおじいちゃんを見た。

「いや、総司令官は綾姫のままじゃ」

「なんでよ?」

「わしが総司令官になってしまつとこの小説の題名が変わつてしまふ。

なので、わしは仕事の連絡を社員達に伝える役目じゃ。

まあ、わしが死んだときは佳奈にやつてもらえば良いじゃないか」

「…わかつたわ。

じゃ、部屋はどうするの?」

「ここになるだろう。

綾姫はどこか、あいてる部屋に移動してもらえるか?」

「じゃあ佳奈の部屋に行つて良い?」

綾姫は佳奈に訊ねた。

「はい、もちろんです」

「それから、みんなに伝えといてね。

あたしの部屋は佳奈の部屋に移動したって。

じゃないとあたしに用事のある社員が困っちゃうもの」

「おじいちゃんにまかせなさい」

おじいちゃんは胸を叩いて綾姫に言った。

そのあと、綾姫と佳奈は部屋へ向かった。

「佳奈っておじいちゃんの親戚なんだよね？」

確か、仕事がなくて困ってたところでおじいちゃんがここの見張り役として佳奈を採用してきたって聞いたけど」

部屋へ向かつてる途中で綾姫は佳奈に話しかけた。

「はい、だから私には能力がないんです」

「それですつと見張り役を任されたのか」

あたし達みたいな能力者を佳奈はどう思う？」

「…素晴らしいと思います。」

綾姫さんみたいに強い力があって、その力を他人を救うために使うのはやっぱり素晴らしいと思いますよ。

犯罪に走ってしまう能力者達はしょうがないと思ったりもします。

今まで普通に生活してきた人にいきなり強い力が目覚めたら、正気を保てるはずがないですし」

「そうね。」

あたしもそうだったし。

周りにおじいちゃんっていう化け物じみた能力者がいたのに、能力に目覚めたときは勝てるかもしれないと思って何度も挑戦したりしてたからね」

やがて二人は部屋に到着した。

「佳奈の部屋は確か佳奈を入れて三人だったよね？」

「はい、私じゃ新入社員に戦い方を教えることは出来ないので」

「ちなみに、誰と一緒にだっけ？」

「さつきさんと、新しく入った美由紀さんです」みゆき

「さつきと同じ部屋だったのね」

綾姫はため息混じりに言った。

「嫌だったんですか？」

佳奈は落ち込んだようにため息をはいた綾姫に訊ねた。

「別に嫌ってわけじゃないわ。

ただ、またからかわれるのかと思って」

「さつきさんは人をからかうのが好きですからね」

綾姫と佳奈はしばらく笑いあった。

「あれ？なんで綾がここにいるの？」

仕事から帰ってきたのか、さつきと見知らぬ女性が部屋にはいつてきた。

「あ、うん。

おじいちゃんが戻ってきたからこの部屋に引っ越してきたの。
で、その人が美由紀？」

綾姫はさつきの横に並んでいた見知らぬ女性を見ながら言った。

「そうよ、これが美由紀。

って、なんで名前知ってるの？」

「さつき佳奈に聞いたから」

「あら、じゃあ美由紀、綾に挨拶しなさい」

さつきは美由紀を綾姫の前につきだし、挨拶をさせた。

「あ、あたしの名前は美由紀です。

よろしくお願いします」

美由紀は綾姫にお辞儀をした。

「あたしのことは知ってる？」

「はい、総司令官の白木綾姫さんですよ？」

美由紀は面接の時に綾姫に自己紹介されたので覚えていた。

「改めてよろしくね、美由紀」

綾姫は右手を差し出した。

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

美由紀も右手を差し出し、二人は握手をかわした。

「一部屋に4人いてもそんなにきつくはないわね。
あたし、ベット使って良い？」

「良いよ、あたしは床に布団敷くから」

どうやらベットはさつきが使っていたようだ。

さつきは綾姫にベットをゆずって床に座った。

「はー、なんか良い匂いがする」

綾姫はベットに顔を押し付けて匂いをかいだ。

「おやじか、あんたは」

さつきの突っ込みで部屋の住人はしばらく笑いつづけた。

平和だった。

「美由紀はなんでここに入ろうと思ったの？」

笑いがやんで部屋が静かになったとき、綾姫は唐突に美由紀に訊ねた。

「私のお兄ちゃんがここに所属したっていうのを小耳に挟んでちょっと前からこの会社に入りたいな、って思っていたときに社員募集のポスターを見たんです。それでここに来ました」

「そうなんだ
で、お兄ちゃんって誰？」

綾姫は美由紀に訊ねた。

「氷室龍夜っていう名前なんだけど」

美由紀はさらりと言い放った。

「……………」

部屋は一気に静まり返った。

「ええええええええ！？」

美由紀を除いて部屋の住人は驚き、声を揃えて叫んだ。

「まさか龍夜に妹がいるなんて…！」

綾姫は驚きながら言った。

「兄弟なのに全然似てないね」

さつきは龍夜の顔を思い出しながら言った。

「実力はどうなんですか？」

佳奈は美由紀に訊ねた。

「お兄ちゃんには手も足も出ません。

昔から強かったんですよ、お兄ちゃん。
能力に目覚めるのが早かったですから」

「いつ頃、龍夜は能力に目覚めたの？」

綾姫は間髪入れずに訊ねた。

「確か2歳の頃です。

あたしが生まれる前には能力に目覚めてたってお父さんから聞きましたから」

「2歳で能力に目覚めたやつなんて聞いたことないわ…
あいつの力が強いのはそのせいかしら…？」

綾姫は一人で考えた。

「お父さんも凄く強かったんですがお兄ちゃんが5歳になったときにはすでに抜かれちゃったって言ってました」

「じゃあさ、美由紀のお父さんもここにいれようよ」

綾姫は提案した。

「……………」

しかし美由紀は黙り込んでしまふ。

「……………どうしたの？」

綾姫は急に黙り込んだ美由紀を心配して声をかけた。

「……………お父さんは殺されたんです」

美由紀はボソツとつぶやいた。

「え…？」

綾姫もさつきも佳奈も、美由紀の一言に驚いた。

「だ、誰に…？」

綾姫は恐る恐る訊ねた。

「……………お兄ちゃんが…
お父さんを……………」

美由紀は何かにおびえたように身体を震わせながらゆっくり言った。

「え……………？」

綾姫は言葉を失った。

「あたしのお父さんだけじゃなくて、あたし達の住んでいた街を氷付けにしてから、ばらばらにしたんです。」

あたしはなんとか逃げたんですが…

他のみんなは全員、お兄ちゃんに殺されました。

あのときの…お兄ちゃんは…

悪魔みたいでした…

これは、今から4年前の事件です」

「あ…はは。」

龍夜は4年前に何かがあったのね。

確か、恭子姉さんの両親が龍夜に殺されたのも4年前だから」

「絶対になにかあるね」

さつきも綾姫の推理に同意した。

「でも、お父さんが殺された翌日、あたしはお兄ちゃんの事が気になって家に戻ってきたんですが、お兄ちゃんは何かに絶望したように黙り込んでいて…

あたしに謝ったんです。

父さんを殺してごめん、って。

それから、街に住んでいた人達の親族の方を探してあちこちへ謝りに行くと言って街から出ていきました。

あたしはお兄ちゃんについて行こうとしたんですが、怖くなっちゃってついていくのをやめたんです。

それからあたしはこんなことを考えました。

能力者がお兄ちゃんを操ったんじゃないかって。

気になってお兄ちゃんのあとを探していたら、ここにたどり着いたってわけです」

「……確かに、洗脳的能力は存在するわ。」

龍夜はいつ、マスターアビリターになったかわかる？」

「あたしのお父さんが殺された翌日にはすでに紋章が刻まれていました」

「となると、マスターアビリターと同じくらいの力の持ち主の仕業
ってことになるわね」

綾姫は冷静に分析した。

「そうだね、翌日にマスターアビリターになったっていうことはす
でに龍夜はマスターアビリターに近い力を持っていたはずだからね。
それだけ強い力を持つ者に洗脳的能力をかけるには洗脳する人間に
匹敵するか超さなきゃ操れない。」

能力者っていうのは己が強ければ強いほど能力に対する耐久性があ
がるからね。

ちよつと分かりづらいわね。

例をあげると、マスターアビリターである氷室龍夜は能力に対する
耐久性が凄まじく高いの。

だから能力に目覚めたばかりの素人能力者では龍夜に傷ひとつ与え
られない。

龍夜に傷をつけることが出来るのは、マスターアビリターに匹敵す
る能力を持つ人間か、マスターアビリターを超える能力を持つ人間
しかないってわけ」

さつきは長々と話した。

「つまり、マスターアビリターと同じくらいの能力者じゃなければ

龍夜を洗脳するなんて不可能。

正直、龍夜以外にマスターアビリターがいるなんて考えられないわ。でも、4年前に龍夜は別人のように人を殺したのよね。本人に聞くしかなさそうだけど…」

「聞きづらいですね」

「話してやるよ」

不意にドアが開かれた。

「龍夜!？」

「お兄ちゃん!？」

「龍夜さん!？」

「龍夜!？」

皆は声と視線を揃えて部屋のドアを開けた龍夜に驚いた。

「まったく、お前の部屋に行ったらじじいがいてよ。

お前はこの部屋にいるって聞いたから来てみたら、俺の噂なんてしてやがって」

「あたしに、用事があったの？」

綾姫は龍夜に訊ねた。

「貴志が一人前になったぜ。あいつなかなか才能あるな」

「そうなんだ…」

綾姫は適当にうなづく。

「あまり驚かないってことは、そんなに俺の過去が知りたいってことか」

綾姫はゆっくり、首をたてに振った。

「じゃあ話してやる。

と、そのまえに、恭子も連れてきた方が良さそうだな」

龍夜はそう言って部屋を出ていき、数分後に恭子をつれて部屋に戻ってきた。

「よし、揃ったな。
じゃあ話すぞ」

龍夜はうえを向いて過去の事を思い出しながらゆっくりと語り始めた。

第十話 氷室龍夜の過去

「ただいま…」

ゆつくりの我が家のドアを開け、美由紀は死にそうな声で家の中に入った。

「おかえり、美由紀。
暑かっただろ？」

美由紀のお父さんはタオルを渡しながら言った。

「暑いなんてものじゃないよ…
溶けるかと思っただもん…」

…お兄ちゃんは？」

美由紀はお父さんから受け取ったタオルで額の汗を拭いながら家の中を見回して兄がいないことに気付いた。

「修行だそうだ。

一人でどこかへ行ってしまったよ。

だが、お昼には帰ってくると言ってたからもうそろそろ帰ってくるだろ」

お父さんは美由紀に丁寧に説明する。

現在11時半をちょっと過ぎたところだ。

「お兄ちゃんが帰ってきたらお昼ご飯にしようよ。」

あたしお腹すいちゃったよ」

美由紀はお腹をさすりながらつぶやいた。

「そうだな、じゃあ今からご飯を作って龍夜を待つか。
美由紀、手伝ってくれ」

お父さんは言いながら立ち上がり、冷蔵庫へ歩み寄っていく。

「はい」

美由紀もお父さんの後ろをついていき、お父さんから料理に使う材料を受け取ってキッチンへ向かった。

「カレーライス？」

美由紀は材料を運び終わった時に料理を予想した。

「当たり前、アツアツのカレーライスにするつもりだ」

お父さんは胸を張って言った。

「信じられない…」

こんな暑い日にアツアツのカレーライスなんて」

美由紀は呆れ果てた。
あき

「はっはっは！

暑いときに食べるからこそそうまいのだ！」

お父さんは笑いながらカレーライスを作り始める。

やがて、アツアツのカレーライスが食卓に並んだ。

「遅いな、龍夜のやつ」

お父さんは時計とカレーライスを交互に見ながらつぶやいた。

「もう12時半だよ…」

どこで道草くつてるのよ」

美由紀は駄々（だだ）をこねる子供のようにじたばたした。

「ただいま」

その時、玄関のドアを開く音と共に龍夜の声が聞こえた。

「お兄ちゃん！」

美由紀はその音に反応して玄関へ駆け出した。

「美由紀、ただいま」

龍夜は玄関まで迎えに来た美由紀に挨拶をかわす。

「お兄ちゃん、おかえり。」

カレーライス出来てるよ、早く食べようよ」

美由紀は靴を脱ぎ終わった龍夜の服を引っ張りながら歩き出す。

「カレーか、確かにうまそうな匂いがするぜ」

龍夜は歩きながらつぶやいた。

「おお、龍夜。

おかえり」

「父さん、ただいま」

挨拶が済むとさっそくカレーライスを食べ始めた。

「うまいな、父さん」

龍夜は一口食べて感想をのべた。

「美味しい！ちょっと熱いけど……」

美由紀も感想をのべた。

「うん、我ながらなかなかの出来だな」

お父さんも感想をのべた。

お母さんはずいぶん前に病気で死んでしまった。

龍夜はお母さんの事をわずかに覚えているが美由紀は顔すら覚えていない。

お母さんは美由紀を生んで一週間程で他界した。

その時、龍夜は5歳だった。

「ごちそうさま」

三人は声を揃えて言った。

「暑い…」

お兄ちゃん、部屋を涼しくして」

美由紀は手で顔をあおぎながら龍夜に言い放つ。

「まったく、俺はクーラーじゃないぞ…？」

龍夜はしぶしぶながら水の能力を使い部屋中を冷気でいっぱいにした。

「あゝ、涼しい」

美由紀はあおぐのをやめて床に寝そべった。

「まあ良いか、この程度の能力じゃないした疲れもこないからな」

能力者が能力を発動するときには体力や精神力や気力といった様々な力を必要とするのだ。

強力な能力ほど膨大な力を消費するため、大技を連発する事は不可能なのだ。

消費できる力がないと能力は使えない。

つまり、疲れはてた能力者は能力を全くとって良いほど使えないのだ。

龍夜のように強い能力者は、消費できる力が多いのと同時に能力を発動するときに消費する力が少ないのだ。

よって、弱い能力なら使い続けても全然疲れなかったりする。

「さて、腹もふくれたし、また修行してくる」

龍夜は立ち上がりながら言った。

「頑張つてこい、龍夜」

お父さんはガッツポーズをとり、龍夜に言った。

「また修行!？」

もう充分過ぎるくらい強いのにまだ強くなりたいの?」

美由紀は驚きながら龍夜に問いかける。

「俺が強ければいざというときに美由紀や父さんを守れるだろ？」

この世界には能力で犯罪を犯すような奴がたくさんいるんだ。

その中には今の俺でも勝てないような奴がいるかもしれないからな」

「それはそうかもしれないけど。

お兄ちゃんが修行してる間にあたし達が悪い人たちに襲われたら意味くない?」

「大丈夫だ、お前達に危険が起きたら本能でわかる。」

すぐに助けてやるよ。
んじゃ、行ってくる」

龍夜は美由紀の反論を聞かずに家を出ていった。

「龍夜君、また修行かい？」

龍夜が家を出ると街の住民に声をかけられた。

「ああ、家族を守るようにもつと強くなる必要があるからな」

この街の住民はみんな仲良しだ。

喧嘩もなく、ただ平和な暮らしをして毎日を有意義に過ごしている。

街から伸びた長い山道を龍夜は一気にかけ登る。

能力を発動するときに消費する体力をつけるトレーニングだ。

山を登り終えたら山頂でじっと座り、精神を統一する。

これは精神力をあげるためのトレーニング。

こんな感じで龍夜はいつも修行をしている。

修行内容が一通り終わると山道をかけ降りて、さっきのトレーニングを繰り返す。

太陽が降り始める前に我が家へ帰って夜ご飯をつくる手伝いをする。

この日も変わらず4時くらいに山を降りて我が家へ帰るはずだった。

「はぁ、はぁ…」

今日もだいぶ疲れたな」

龍夜は山道をかけ降りている途中で前方にこちらを見ている男がいるのに気が付き、男に走りよった。

「見かけない顔だな、観光にでも来たのか？」

龍夜は誰に対しても敬語は使わない。

よって見知らぬ人間であろうとタメ口で話す。

「お前が氷室龍夜だな？」

男は鋭い目付きで龍夜を見た。

「そうだけど？」

俺になんか用か？」

龍夜は不思議そうな表情で男に訊ねた。

「噂を聞いてきたんだ。

この街に強い能力者がいるとな」

「で、どれだけ強いか見に来たのか？」

「違う、私のしもべにするために来たのさ」

男はいまだに鋭い目付きを崩さない。

「俺に喧嘩売りに来たんだな。
良いぜ、相手してやるよ」

龍夜は呼吸を整えいつでも能力を発動出来るようにした。

「怒れ、私以外のすべての人間に怒りをぶつけろ！」

男は大声で叫んだ。

「…（なんだっ！
なぜか分からないが、無性に腹がたってきた…！）」

「私の能力は感情操作。
お前の感情を怒りで埋め尽くしてあげたのさ」

「ぐあああああああああ！！！」

龍夜の感情は怒りで埋め尽くされ、大声で叫んだ。

「…（理性を…制御…出来ない！
この…ままでは…街のみんなが…危険だ）」

怒りの感情を必死に押さえようとするが身体は全くいうことを聞かず街へ向かっていく。

龍夜の身体の周りにとてつもない冷気のオーラが発生する。

その冷気のオーラによって辺り一面が凍り始めた。

「おっと、私まで凍ってしまふ。
遠くで観察することにしよう」

男はつぶやき、山道を登っていった。

「なにこれ!？」

「街が凍る!」

「みんな逃げろお!」

街中が騒がしくなる。

龍夜は逃げる住民達を容赦なく氷付けにしてしまった。

「…(みんな…逃げて…くれ…!
父さん…美由紀…!」

龍夜は怒りにより身体の制御が出来ず、思ってることを口にする事も出来ない。

「龍夜…!」

お父さんが家から出てきて、龍夜を見て驚いた。

これが龍夜なのか？

そんな疑問を抱いたように龍夜を見つめる。

龍夜はどんどん街に近づいてくる。

お父さんはかつてない恐怖に襲われながら龍夜を見続けた。

「なにがあつたの？お父さん」

美由紀も家から出てきた。

美由紀の声でお父さんは正気に戻り、叫んだ。

「見ちゃダメだ、美由紀！」

お父さんは美由紀に変わり果てた龍夜を見ないように言ったが、すでに遅かった。

「お兄…ちゃん……？」

一目見ただけでわかる。

龍夜が怒りに満ちていることが。

目付きはかなり鋭く、目だけで人を殺せるんじゃないかという錯覚に襲われるくらい冷徹な目をしていた。

「美由紀、逃げろ！」

お父さんは美由紀に叫んだ。

「う、うん」

美由紀は父の声に素直にうなづき、一目散に村を出ていった。

お父さんは龍夜に向かってゆつくりと歩み寄っていく。

街にいた住民はすでに全員氷付けにされていた。

家も凍り始めているが、お父さんの周りだけは凍っていない。

「……（父さん…逃げろ！

なにを…してるんだ…！

早く…逃げろ…！）」

龍夜は必死に理性を押さえて、お父さんだけは守っていたのだ。

だが、それも長くは続かなかった。

「死ね、親父」

龍夜は冷たく言い捨てた。

龍夜は完全に理性を奪われてしまったのだ。

お父さんの心臓付近にでっかい氷の槍が刺さっていた。

「…龍…夜……」

お父さんはそれだけ言って倒れた。

即死だった。

だが、龍夜は全能力を使って大技を発動しようとした。

数分で龍夜の頭上に巨大な水の球が出来た。

そして、あるうことが、その巨大な水の球を一瞬で気化させてしまった。

水が気化したとき、体積は1700倍になる。

その結果どうなるのかというと、水が一瞬で気化することによって爆発が発生するのだ。

水蒸気爆発という。

辺り一面が爆発による風圧で吹っ飛んだ。

残ったのは家のかけらだった。

そして、龍夜は正気に戻った。

「……俺が…やったのか……？」

龍夜は覚えている。

この爆発は自分が起こしたという事を…

だが、信じられなくて…信じたくなくて……そう言ったのだ。

「熱いつ！」

突如、右手の甲が溶けそうなくらい熱くなった。

左手で右手の手首を押さえながらゆつくりと右手の甲を見た。

そこには、氷の結晶に良く似た紋章が刻まれていた。

「これは、M・Aマスターアビリターの紋章…？」

龍夜は昔、お父さんからマスターアビリターについて聞いたことがあった。

だが、今の龍夜にはそんなことどうでも良かった。

「みんなを…守るために強くなったのに…！
それなのに…こんなこと……！」

龍夜の瞳からは大粒の涙がたれていた。

「嘘だああああああ！！！」

龍夜の叫び声は誰もいなくなつて変わり果てた街にむなしく響き渡った。

街の住民達は龍夜的能力によつて生み出された水蒸気爆発によつてこつぱ微塵に砕けちり、どこかへ吹っ飛んでしまっていた。

ただ一人、美由紀をのぞいて。

美由紀は逃げ切れたのかどうか、この時の龍夜は知らない。

自分が今まで修行で強くなった事は間違いだったのか？

こんな事になるんだっ たら修行なんてしなければ良かった。

龍夜はそんなことを思いながら絶望してその場に座り込んだ。

第十一話 ACG

「ふはははは、凄まじいしもべを手に入れた」

いつの間にか龍夜の目の前に感情操作の能力で龍夜を操った男が立っていた。

「……貴様……！」

龍夜は男を睨み付けた。

「ん？なんだその目は？」

男は龍夜が自分に敵意を向けるはずがないと思っていたので龍夜の目付きに驚いた。

「貴様だけは許さねえ、ぶっ殺してやる」

龍夜は完全に男に敵意をむきだした。

「な、なぜだ……！」

ならば、私の能力でお前に喜びの感情を与えてやる！」

しかし龍夜はまだ敵意をむきだして近づいてくる。

「ば、バカな！」

私の能力がきかなくなったというのか！」

男は完全に動揺していた。

そして、龍夜の右手にM・Aの紋章マスターアビリターが刻まれているのを発見する。

「な、私が長年かけて到達出来なかったマスターアビリターにお前はなつたのか！？
ゆ、許してくれ」

男は命乞いをするが龍夜は容赦しない。

「人を殺すのはこれが最後だ」

龍夜は冷たく言い放ち、男を氷付けにしてから水蒸気爆発を発生させ、こつぱ微塵に砕いた。

「はは…は…
カタキはとつたぞ…」

龍夜はそのまま崩れるように地面に座り込んだ。

マスターアビリターとなった龍夜には並大抵の能力じゃ傷ひとつ与えることが出来ない。

龍夜はマスターアビリターの紋章に誓った。

何者にも操ることの出来ない力を手に入れたのだから、もう二度と人を殺さないと。

この力は、誰かを守るために使う。

お父さんを自分の手で殺してしまった龍夜は、せめて妹だけでも生

き残ってくれていると思い続けた。

そう思わないと、自分を殺してしまうかもしれないからだ。

死ぬことじゃ何も解決しない。

龍夜はずっと絶望していた。

自分を責め続けた。

自分がもうちょっと早くマスターアビリターになっていたら…

街の住民は自分が殺した…

この街の平和を自分が崩してしまった…

父さんを守るはずだったのに逆に殺してしまった…

こんなことをした俺は許されない。

どんなに謝っても絶対に許されることはない。

悪いのは自分を操った能力者だと言っても信じてくれる人がいるだろうか？

龍夜はこの日、１７歳の誕生日を迎えた。

最悪の誕生日だった。

翌日になっても龍夜は一步も動かず、絶対にうちひしがれ、座り込

んでいた。

「お…兄ちゃん…」

背後から聞き覚えのある声がした。

守るべき人間、美由紀だった。

だが、龍夜は首を傾けることすらしないで黙り込んで座っていた。

果てしなく長い沈黙が続いた。

「……ごめん…」

父さんを殺して…ごめん」

沈黙を破ったのは龍夜だった。

「え…？」

美由紀はいつもの龍夜に戻っていた事に驚き、謝った事に驚いた。

「父さんを殺してごめん…」

許されないと思ってるが、謝らせてくれ…」

ごめん、ごめん…ごめん」

龍夜は美由紀に土下座をして何度も何度も謝った。

「もう…良いよ。」

そんなに…謝らなくても…あたしは…お兄ちゃんを…許して…あげるから」

美由紀は涙を流しながらゆっくりと龍夜に言った。

涙で龍夜の顔が見えなくなった美由紀には、かすかに光るものが見えた。

美由紀は涙を拭き光の見た場所を見た。

そこには今までに見たこともない綺麗な紋章があった。

龍夜の右手の甲にあるM・Aの紋章だ。
マスターアビリター

美由紀はマスターアビリターの紋章について何も聞かなかった。

聞くことに意味を見い出せなかったからだ。

聞くだけ無駄だと思ったのだろうか？

「街の人達の親族達に謝りに行かないといけない。
美由紀はどうする？」

「ごめん、あたしは親戚のおじさんの家に行くよ」

美由紀は言いづらそうにつぶやいた。

「そうか…わかった。

仲良く暮らせよ、元気だな」

二人はそこで別れた。

二度と会うことはないだろうと思いながら、それぞれの目的の場所へ向かって歩いた。

龍夜は徹底的に街の住民の親族達を調べて、謝りに言った。

何度も何度も謝った。

何度も何度も殴られたが龍夜は謝り続けた。

龍夜が起こした事件はニュースで取り上げられた。

死傷者157名、犯人は街に住んでいた氷室龍夜。

なぜ犯人がわかったかというと、龍夜が謝りに行った親族が警察に教えたからだ。

警察に追われながらも龍夜は親族を探して謝りに言った。

だが、霧島恭子という名前の親族だけは見つけれなかった。

なぜなら恭子は仕事であちこちに移動していたからだ。

そして龍夜は千葉県に来た。

千葉県には子供の頃に来たことがあった。

龍夜は千葉県に住むことを決めた。

「あとはお前達の知っている話だ」

龍夜はみんなに言った。

「そんなことが…」

綾姫は同情に似た表情を浮かべて龍夜を見つめた。

「龍夜… かわいそう」

さつきも綾姫と同じ表情を浮かべた。

「龍夜さん、苦労したんですね」

佳奈も同じだ。

「あなたにそんなことがあったなんてね…」

あたしの両親を殺してどんな顔して生きているのかと思ったら…

まさか… 自分の父親も殺させられたなんて…

あたしはあなたを恨むべきなのか、あなたを操った男を恨むべきなのか…」

恭子は複雑な表情を浮かべて龍夜を見つめた。

「どっちでもいいさ、俺があんな奴ごときに操られたのが悪い。

もうちょっと早くマスターアビリターになってればこんなことにはならなかったんだしな」

龍夜は悲しげな表情をみんなに見せた。

「あたしは、龍夜は悪くないと思う」

綾姫はハッキリと言った。

「綾姫…」

みんなが口と視線を揃えて綾姫を見た。

「確かに、綾の言う通りだと思う。
操った男が悪いよ」

さつきは綾姫の意見に同意した。

「そうですね、私も龍夜さんは悪くないと思います」

佳奈も綾姫の意見に同意した。

「お兄ちゃんは悪くないよ。
それなのにみんなに謝りに行って、あたしはそんなお兄ちゃんを尊
敬するよ」

美由紀も同意した。

「はあ…怒りの矛先をあなたに向けるのは間違いだったわね」

恭子も綾姫の意見に同意して、龍夜に頭を下げた。

「ごめんなさい、あなたは悪くないわ。
それなのにあたしは…」

「気にするな、恭子が謝ることなんて何もねえよ」

龍夜は笑いながら言った。

「ってことは今も警察に追われてるってこと？」

綾姫は一つの疑問を龍夜に訊ねた。

「その通りだ、だが顔は知られてないから全く問題はない」

「なんで顔は知られてないの？」

親族達が警察に通報したんでしょ？」

綾姫はさらに疑問をなげかけた。

「そうなんだが、俺の写真はこの世に一枚たりとも存在しない。

昔から写真が嫌いだな。

撮られた事がないのさ」

「あらそう、まあ龍夜が追われる理由なんてないしね。

それから、多分警察に通報されてから能力者犯罪捜査組織の本部か、龍夜が住んでいた県の能力者犯罪捜査組織に連絡が行ったはずだわ。だから、気を付けてね」

綾姫は丁寧に忠告した。

「了解だ、丁寧にありがとな」

龍夜は綾姫に顔を近づけてささやいた。

その距離、わずか5センチ。

「か、顔が近いわよ!」

綾姫は一気に顔を真っ赤にして龍夜を両手で遠ざける。

「綾姫をからかうのはこれくらいにしておいて、もう一つ連絡があるんだ」

龍夜は一気に真剣な表情を浮かべて綾姫に言った。

「実はな、噂で聞いたんだが…
あちこちで能力者狩り（のうりよくしゃがり）が始まってるみたいだ。」

能力を使って犯罪を犯す集団、A C G（能力者犯罪集団）というやつらがな」

「A C G?」

みんな、声を揃えて龍夜に訊ねた。

「A C Gとは…能力者犯罪集団の呼び名だ。
それぞれの英語の頭文字をとったらしいが、ネーミングセンスは最悪だな」

龍夜はみんなに言った。

「それは本当なの?」

恭子は龍夜に真剣な表情で訊ねた。

「噂で聞いたただだから信憑性は低いと思う。だが、もし本当なら大変な事になるぞ」

龍夜はいつになく真剣だ。

「大変な事って？」

綾姫は訊ねた。

「やつらの目的は能力者の絶滅。

そして自分達が神となりこの世界を征服する。

俺もあとで調べて分かったんだが、どうやら4年前に俺を操った感情操作の能力者もACGの仲間らしい。

それも、したつぱだということらしいからな」

「龍夜を操った感情操作の能力者が、したつぱなら、リーダーはとてつもなく強いってことになりそうね」

さつきは冷静に分析した。

「で、そのためにお前達は強くならないといけない。

俺はマスターアビリターだからこれ以上は強くなれないからな」

「一度、本部に連絡をとってみるわ」

綾姫はそう言つて総司令官室へ向かった。

「さて、俺達はどうする？」

「強くなりたいなら俺が修行を手伝ってやるが」

「私は能力者ではないので…」

佳奈は断った。

「そうか、まあしょうがねえな」

「あたしは強くなるよ。」

ACGだかなんだか知らないけど好きにさせるわけにはいかないからね」

さつきはヤル気満々だ。

「あたしでも強くなる?」

恭子は龍夜に訊ねた。

「当たり前だ、お前ほどの能力ならマスターアビリターになったとき、俺と同等くらいにはなるだろうからな」

「なら、修行を手伝って。」

犯罪者は野放しになんて出来ないわ。

それに、あなたを操った感情操作の能力者のリーダーを倒すことによってあたしは敵討ちが出来るしね」

恭子は怒りに似た表情を浮かべて、ヤル気満々だった。

「了解」

龍夜は修行を手伝うことに決めた。

「なんですって!？」

綾姫は総司令官室にいるおじいちゃんをどかして電話で本部に連絡をしていた。

「じゃあ本当なんですね？」

「ACGが動き始めてるって事」

「本当だ。」

すでに何カ所かの能力者犯罪捜査組織は壊滅状態にされている。
現在入った報告によると、ACGは少数精鋭。

たった一人で能力者犯罪捜査組織に攻め込んだらしい。
すでに何人かは他界してしまったと連絡が入っている。

千葉県の総司令官、白木綾姫。

くれぐれも気を付けてくれたまえ。

こちらはACGの調査をしている。
なにか分かり次第連絡する」

そう言い残して電話は切れた。

「おじいちゃん、大変な事になったわ。」

能力者犯罪集団、ACGという者達が能力者狩りを始めているらしいの」

「そうか、ならわしの出番じゃの。」

だが、相手はかなりの強者^{つわもの}と見た。
わし一人では勝てないだろう。

強い者達を集めろ、早くだ」

おじいちゃんは真剣な表情を浮かべて綾姫に言った。

「わかったわ」

綾姫が総司令官を出ようとしたとき、ドアが何者かの手によって破壊された。

「あんたが総司令官か？

老いばれじい。

いや、この小娘か？」

ドアの前に現れたのは目付きが悪く、全身真っ黒の服を来ている長身の男だった。

「……（こいつ…何者…！

近くにいただけで金縛りにあったように身体が動かない…！）」

「お前さんがACGの奴か？」

綾姫のおじいちゃんは立ち上がり、黒い男に訊ねた。

「その通り、ACGの一員だ。

No.47、漆黒の暗殺者リオンだ」

リオンと名乗った黒い男はどこからともなく剣を取り出した。

「No.47？」

綾姫は訊ねた。

「我らACGのメンバーには強さに応じて番号がつけられる。番号は全部で50まである。番号が低ければ低いほど強い」

「ならあんたはしたつぱってことね」

綾姫は挑発した。

「なめんなよ」

リオンは刹那の間に綾姫の身体を数十回切り刻んだ。

「な……綾姫！」

おじいちゃんは何が起きたのか分からなかった。

「刹那の間に47回切り刻んだのさ。
こいつはもう二度と目を覚まさない。
俺の剣技をまともにくらって生き残れる奴はいない」

綾姫はぐったりと倒れていて、身体からはとてつもない量の血が流れていた。

「……我が大事な娘を傷つけた代償はでかいぞ。
わしはこうみえてマスターアビリターに近い実力を持っている」

「あははははは」

リオンは睨み付けているおじいちゃんを笑った。

「何がおかしいんじゃない！」

「笑わせるなよ、マスターアビリターになり損ねた老いぼれごときが俺を倒せると思ってるのか？俺を倒すどころか、傷ひとつ与えることは出来ないぜ」

リオンは余裕の笑みを浮かべた。

「わしをなめるな！」

おじいちゃんの叫び声と共に白い閃光がリオンの心臓に直撃した。

「ん？今なにかしたのか？」

リオンには傷ひとつついてない。

「バ、バカな！」

わしのとっておきが……」

おじいちゃんはレベルの違いを思い知らされて言葉をなくした。

「死ねよ、じいさん」

リオンは無邪気な笑みを浮かべて刹那の間に47回、切り刻んだ。

「……（こやつ……強すぎる……マスターアビリター並みの強さだが……何かが……違う気がする……もしか……こやつ……精霊の力を……使ってるのか……）」

それだけを頭の中で分析したあと、おじいちゃんの心臓は止まった。

第十二話 本部

「なんの騒ぎだ…？」

龍夜は佳奈の部屋から出ようとしたとき、総司令官室の方が騒がしいのに気が付いた。

「何かあったのかしら？」

恭子はつぶやいた。

「行ってみましょう、佳奈はここに残って。」

佳奈は能力者じゃないから、いざというときに危険だからね」

さつきは万が一の事を考え、佳奈を部屋に残した。

「なぜだか分からないけど、危険な予感がする」

美由紀は肩を震わせながらつぶやいた。

「美由紀もここに残れ。」

危険な予感が漂^{ただよ}ってやがる」

龍夜は美由紀は部屋に残るようと言って、みんなと共に総司令官室へ向かった。

総司令官室の前に黒い男が立っていた。

「ん？氷室龍夜？」

ようやく見つけた」

黒い男：リオンは龍夜を見ながら言い放った。

「あ？誰だお前？」

龍夜はリオンを知らないみたいだ。

「おっと、自己紹介してなかったな。
俺の名前はリオン。」

ACG：能力者犯罪集団のNo.47、漆黒の暗殺者リオンだ。
本名はリオン・ヴェルサスと言う」

リオンは丁寧に自己紹介をした。

「名前など聞いてねえ。
なぜ俺の名前を知ってるんだ？」

「君が殺したキールという男が持っていた情報だよ。
あ、キールって言っても分からないか。
感情操作の能力者と言えば伝わるか？」

「いまいち話が理解できないんだが…
お前は死人と会話できるのか？」

「精霊に聞いたのさ。
キールにも精霊がいた。
弱い精霊だったけどね。」

精霊同士はどんなに離れていても会話することが出来る。
つまり、キールと君が戦った事やキールが死んだことも、全て知っ

ている」

「精霊……だと……?」

龍夜の顔は一気に青ざめた。

「精霊について知ってるのか。」

まあ、これで俺がどれほど強いかわかってくれたか?」

「No.47と言ったな。」

つまり、お前より強い奴が46人もいるということか!」?

「その通り、俺の仲間達は今、あちこちの能力者犯罪捜査組織に向いているはずだ。」

ものの数分で壊滅するだろうね。」

ここも含めて、ね」

リオンは無邪気な笑みを浮かべた。

「逃げろ、こいつは俺が食い止める」

龍夜はリオンを睨み付けたまま恭子とさつきに言った。

「でも、龍夜一人で大丈夫なの?」

さつきは訊ねた。

「お前らじゃ足手まといにしかならねえ!今すぐみんなを連れてここから逃げろ!」

龍夜は叫んだ。

「わ…わかった」

さつきと恭子は龍夜の覚悟に素直にうなづき、美由紀や佳奈達と共に建物から逃げた。

「なぜ逃げる邪魔をしなかった？」

龍夜はリオンに訊ねた。

「雑魚はいつでも殺せる。」

それより、地上でただ一人のマスターアビリターである氷室龍夜を相手にした方が楽しそうだし」

リオンは無邪気に微笑んだまま龍夜に言った。

「ふっ、生まれて始めてヤバイと思ったぜ。」

まさか精霊の力を持つてるとはな…」

龍夜は恐怖心を抱きながら言った。

「じゃあそろそろ始める？」

あ、その前に一つだけ教えといてあげる。

俺の能力は必殺。

刹那の間に47回切り刻み、必ず殺す力。

まあ、マスターアビリターである君なら5回くらい耐えられると思うけどな」

「なぜ俺にそんな事を教えた？」

龍夜はなぜ自分が不利になるような事を言ったのか分からなかった。

何も教えずに自分の能力を連発すれば簡単に殺せたはずなのに、と。

「ハンデだよ。」

簡単に死んじゃつまらないじゃん。

言っとくけど、俺は君より10倍強いよ」

「上等じゃねえか」

龍夜は一瞬だけ微笑み、いきなり本気で能力を発動した。

龍夜の前方から氷の槍が大量に形成され、リオンに向かって飛んでいく。

「ごさかしいよ」

リオンは刹那の間に大量の氷の槍を全て切り刻み、粉々にした。

「まだだ！」

龍夜は砕けた氷を水に変えてリオンを取り込み、また氷に変えてリオンを氷付けにした。

だが、氷付けにした瞬間にリオンをおおっていた氷は砕け散った。

「バカな……！身動きできないから剣を振るうことは出来ないはず……！」

「忘れたのか？」

俺には精霊がついてるんだぞ？

たとえ身動きできなくても精霊は攻撃できる」

「……（こいつ……掛け値無しにヤバすぎる。

こいつより強い奴がまだたくさんいると言っのか！？）」

「今度は俺の番だよね」

リオンが言い終わった瞬間、龍夜の身体に無数の切り傷がついていた。

「……なぜだ……！」

剣の攻撃範囲には入ってねえぞ……？」

「いちいち驚かないでよ。

俺は凄まじい速さで切ることが出来る。

それによりかなり離れた所にまで真空波が伝わるんだよ。

まあ、普通に切るよりは威力は低くなるけどね」

「は……はは。

こんなに恐怖を感じたのは生まれて始めてだ」

龍夜は恐怖でわずかに身体が震えている。

「もっと楽しませてくれよ。

マスターアビリターは俺達の敵の中では最強なんだから。

君が死んだらこの世界は俺達の物になるんだよ？

もっと本気でやってくれなきゃ」

「…充分、本気なんだがな…」

「いや、まだ君は本気じゃない。

君は俺を殺さずに倒す方法を考えてる。

俺を殺す気でやればもつと力は使えるだろ？」

「…どうやらそれしか方法がねえみたいだな。

どのみち、お前を殺さねえとみんな死んじゃうんだからな。

なら、たった今からお前を本気で殺しにかかる」

龍夜は全能力を解放した。

その瞬間、辺り一面が凍りついた。

「ほう、絶対零度のオーラを身に纏^{まと}ったのか…

これで実力は俺の3分の1くらいかな」

リオンは未だに余裕の表情を浮かべている。

「3分の1かどうかは自分の身体で確かめな！」

龍夜は手を後ろに伸ばして、水蒸気爆発を発生させとんでもないスピードでリオンの顔面を殴った。

殴ったあと、接触しているリオンの頬^{ほほ}と龍夜の拳の間から水が滲^{にじ}み出し、それを気化させ水蒸気爆発を発生させた。

リオンは吹っ飛ばされ、壁に激突した。

「…な…なぜだ？」

君のどこにそんな力が…」

リオンは殴られた所を左手で押さえながら右手に持っている剣を握りしめた。

「なぐんちゃって」

リオンは壁に打ち付けられたはずなのに、一瞬で龍夜の後ろに回り込んだ。

そして直接龍夜の身体を切り刻んだ。

「ぐああああ！」

リオンの攻撃をまともにくらった龍夜はそのまま倒れ込んだ。

「さっきの攻撃、普通の奴なら致命傷だったか、死んでいただろうね。」

だが、精霊の加護を受けてる俺には致命傷にならない。でも、ちよつとだけ痛かったよ」

「てめえ、もはや化け物だな。」

勝てる気がしねえよ

で、さっきの瞬間移動はどういう原理だ？」

龍夜は絶望した。

「精霊の力だよ。」

俺のような超高速の能力に精霊の力をプラスすることによって身体も超高速で移動することが出来る。

これだけ丁寧に説明してるのに俺に大ダメージを与えることが出来ないのか…

マスターアビリターと言ってもこの程度か。
もはや俺達に敵はいないな」

「能力が分かっているにもならねえこともあるんだよ」

「……（待てよ？精霊の力を使っているも身体は人間と同じ構造なんだよな？
ってことは…！）」

龍夜は希望の光を見つけ出した。

「もう終わりにしようか」

リオンはそう言って瞬間移動して龍夜の背後へ回り込んだ。

「甘いんだよ！」

龍夜は瞬時な背後を振り返りリオンの左肩に触れた。

龍夜はがリオンの左肩に触れた瞬間、リオンの左腕はこっぴ微塵に
砕け散った。

「ぐあああ！」

リオンはなくなった左腕を押さえるようにして叫んだ。

「な、何をした！？」

「お前の体内なある水分を気化させて内側から水蒸気爆発を発生させたんだ。」

「どうやら、大ダメージは与えたみたいだな」

「…もう許さない！

容赦なく切り刻んでやるよ！」

リオンは精霊の力で瞬間移動をしながら超高速の剣技を放ち、それによって発生した真空波で龍夜を切り刻んだ。

「……（片腕がなくなっても剣技の威力が下がってない…！

正真正銘の化け物だぜ…！」

龍夜は必死に真空波をかわそうとするが、リオンの攻撃速度が速すぎる。

「…（あいつの身体に触れないと内側からの水蒸気爆発は起こせない…！

だが、精霊の力で瞬間移動しながら一定の距離を保ち、攻撃をしているからなかなか近づけない）」

龍夜は背後で水蒸気爆発を発生させ、自分の身体をリオンに向かって吹っ飛ばした。

「面白い、どちらが上か分からせてやる」

リオンも龍夜に向かって走り出した。

二人が近づいた時、リオンは超高速の剣技で龍夜を攻撃、龍夜はリオンの胸に手を置いて水蒸気爆発を発生させた。

……

……

…

「…（さすがに、これ以上は戦えなさそうだ…
ダメージをくらいすぎた）」

龍夜はリオンの剣技をくらい、そのまま後ろへ倒れた。

「…（あいつが立ち上がったら、俺の負けだな…）」

「はあ…はあ…

胸にでっかな穴があいちまったぜ」

リオンの声が聞こえた。

龍夜はかろうじて身体を起き上がらせ、リオンを見た。

リオンの胸はなくなっており、お腹からのびた皮膚がギリギリで首と繋がっていた。

精霊の加護を受けているのでまだ死んではない。

「さすがに、今は効いたぜ…

だが、君はもう立てない。

俺の勝ちだな」

「……そうみたいだな……」

龍夜はそのまま仰^{あお}向けに倒れた。

「君はかなり強かったよ。
だが、相手が悪かったな。
安らかに眠れ…氷室龍夜」

リオンは剣技を繰り出そうと、剣を握りしめた。

その後、切られた。

リオンが。

「綾姫、でかしたぞ…！」

龍夜はリオンの背後から現れた綾姫をかすかに見て、言った。

「ば、バカな！あの一撃で死んだはず…！」

「…あたしを…甘く見ないで…欲しいわね…」

綾姫はボロボロになった身体で、立っているのがギリギリだった。

「ならば…もう一度くらわせてやる！」

リオンは超高速の剣技を使おうとしたが、なぜか使えなかった。

「な、なぜだ…！
なぜ発動しない…？」

「…そうか、綾姫の持つイレイズブレイドの力によって精霊を消したのか…」

精霊が消えればお前は精霊の力を使うことは出来ない」

「ぐっ、小娘ごときに…！」

綾姫はリオンに手錠をかけた。

「勝った…んだよな」

龍夜はつぶやいた。

「…そうね…お互い、ボロボロだけどね」

綾姫はそう言つて崩れるように地面に座り込んだ。

「…たく…ACGつてのはこんな化け物の集団なのか…
こいつより強い奴がまだ46人もいるらしいからな」

「修行しなきゃダメね、あたし達」

「無理だと思うぜ。」

のんきに修行なんてしてる時間はないはずだ。

すぐにでもACGの奴らが来てもおかしくない。

マスターアビリターは世界中で俺一人だからな。

傷が全回復する前に俺を殺そうと思うのは当然だ」

「…なら、本部に行きましょう！」

本部にはかなり強い能力者がたくさんいるの。

マスターアビリターはいないけど、色々な能力を持った人達がいる

から敵の弱点をつくことが出来るかもしれない」

「…そうだな、なら本部へ行こう。
今すぐにな」

綾姫と龍夜はお互いに肩を貸しながら車に乗って能力者犯罪捜査組織の本部へ向かった。

第十三話 修行

「千葉県有能力者犯罪捜査組織総司令官の白木綾姫です。中へ入れてください」

本部にたどり着いた二人は見張り役の、でかい男性に言った。

「承知しました。
どうぞなかへ」

本部の入り口にある大きな扉がゆっくりと開かれた。

本部はかなり広く、迷子になりそうだった。

ひたすら真っ直ぐ進み、総司令官室にたどり着いた。

綾姫はノックをして言葉を発した。
はっ

「千葉県の能力者犯罪捜査組織、総司令官の白木綾姫です」

「中へ入ってくれたまえ」

ドアの向こうから声が聞こえて、二人は総司令官室へ入った。

「始めまして、総司令官様」

綾姫は深々と頭を下げた。

「なんだ、おっさんじゃねえか。」

ま、よろしくな」

龍夜は誰に対しても敬語は使わない。

よって、上司であろうとタメ口で話す。

「はっはっは、なかなか面白い人だな。

君が世界でただ一人のマスターアビリター、氷室龍夜だな？」

40歳くらいの中年の男性は笑った。

「そうだ、良く知ってるな、おっさん」

「敬語を使いなさいよっ！」

綾姫は龍夜を叱りつけた。

「はっはっは、別に構わないさ。

力では私のほうが弱いからね。

いくら偉くても力が弱いんじゃないだろう？」

「総司令官様がそういうなら」

綾姫はしぶしぶならがうなづいた。

「さて、その傷はACGにやられたんだな？

報告してもらえるか？

何があったのか」

「はい、No.47漆黒の暗殺者リオンと名乗る者がやってきてあ

たしとおじいちゃんを切り刻んだあと、龍夜と戦ってギリギリで龍夜が勝ちました」

綾姫は簡潔に説明した。

「奴は精霊の力を使っていたぞ、おっさん。今回はなんとか勝てたが、連戦となると勝ち目はゼロだ。どうする、おっさん？」

「清々しいくらいの上から目線だな……まあ、嫌いではない」

「おっさんには好かれたくないんだがな」

「はっはっは、なかなか口が達者だな。まあそんな事はおいとして、奴らは全員、精霊の力を手に入れている。違法な方法でな。」

精霊を作り出した、という事が考えられる。なぜなら精霊の力を正規に手に入れる事が出来るのはマスターアビリターのみだからな。言ってることがわかるか、龍夜君？」

「……鳥肌たつたじゃねえか。頼むから龍夜って呼んでくれ。まあ、話しはわかったぜ。」

つまり、俺に精霊の祠へ行けつてことだな？ 精霊の祠へ行つて精霊の力を手に入れてこい、と」

「その通りだ。」

しかし、知ってるかは知らないが精霊の力を手に入れるには試練を受けなければならない。

へたしたら命を落とすことになるかもしれない。
それでも行ってくれるか、龍夜？」

「当たり前だ、おっさん。

どうせ力を手に入れないとみんな死んじまうんだ。
だったら精霊の試練で死んだほうがまだましだろ？

それに、俺は死なねえ。
死ぬわけにはいかねえ」

「龍夜、ありがとう。
さて、綾ちゃん」

龍夜に簡潔にお礼を言っ て綾姫に話しかけた。

「すみません、綾姫と呼んで下さい。
鳥肌がたちました」

綾ちゃんと呼ばれたのは始めてであり、40代の中年の男性に言われると気持ちが悪い。

「はっはっは、冗談だ。

綾姫はイレイズブレイドの強化、そして体術の強化をしてもらう。
ようするに修行だな。

あ、安心してくれ。

もしACGがここに攻めてこようとしてもかなりの時間を稼げる。
結果が張ってあるからな。

1日攻撃され続けても壊れることはない。
いくら精霊の力を使っ ていてもな」

「すごい結界なんですね」

綾姫は驚いた。

「龍夜には地図を渡す。

そして精霊の祠に行き、精霊の力を手に入れて来る。

綾姫は私や他のみんなと共に修行をしよう。

綾姫の持つイレイズブレイドは精霊使いにとって天敵だからな。
これを鍛えないことにはいけないだろう」

「わかりました、修行頑張ります」

綾姫は言った。

「じゃあ早く地図をよこせ、おっさん」

龍夜は偉そうに言って手を差し出す。

総司令官はその手を固く握りしめた。

「なにしゃがんだ、じじい。

気持ちわりいな」

龍夜は固く握りしめられた手を振りほどき、総司令官をにらんだ。

「はっはっは、冗談だ。

さて、これが地図だ。

龍夜には水の精霊の祠を訪ねてもらう。

ってかそれ以外の精霊の祠へは龍夜じゃ行けないからな」

精霊の祠へは誰でも行けるのだが、その能力のマスターアビリターじゃないと祠の中へは入れない。

精霊の祠は能力の数だけ存在する。

その能力を極めて、マスターアビリターになったものだけが精霊の力を手に入れる事が出来る。

A C Gは違法な方法で精霊の力を手に入れたが。

龍夜は地図を受けとるとすぐに向かった。

綾姫は総司令官と共に修行場へ行き、さっそく修行に取り組んだ。

この時、さつきや佳奈や美由紀や恭子は本部の者によってここへ案内され、修行をやらされた。

佳奈は能力者ではないので、保護したという形になる。

他の県の能力者犯罪捜査組織の一員は全て壊滅。

生き残りはゼロ。

千葉県有能力者犯罪捜査組織では、綾姫のおじいちゃんがかろうじて息を吹き替えし、貴志は逃げ延びた所を本部の者に案内され、ここへやってきた。

貴志も修行をやらされた。

ACGの調査を担当していた本部の者が手に入れた最新の情報によると、ACGの奴らがここへ攻めてくるのは3日後。

一斉に攻撃をしかけてくる模様。

たった3日しか時間がないので、超ハードな訓練が行われた。

綾姫はイレイズブレイドの能力を強化し、マスターアビリターにするのが目的だが、たった3日では絶対に不可能だ。

なので、体術を集中的に強化しながらイレイズブレイドを使った実践訓練を行った。

他のみんなは能力の強化を集中的にやり、ついでに体術を強化するトレーニングをやらされた。

やがて訪れる最後の戦いに向けて…

その頃、龍夜は…

「はぁ、遠すぎる」

本部が東京都で、これから向かう精霊の祠は北海道にある。

車で空港に行き、飛行機で行かなければならない。

かなりの時間がかかる。

「はぁぁぁ！」

綾姫は総司令官と実践訓練をしていて、手加減抜きの本気の勝負の真っ最中だ。

「甘いぞ、綾姫」

総司令官は必死に攻撃をかわす。

「精霊使いと戦うときは一撃でも与えれば勝ちなんだ。だが、一撃も与えることが出来ないなら勝ち目はないぞ」

総司令官は綾姫に言った。

「はい！」

綾姫は攻撃を休めることなく言った。

綾姫はさっきのリオンとの戦いで傷ついているが、手当てもしないで修行をしている。

理由は一つ。

傷ついてボロボロになつてる状態で修行をすることで、ACGとの連戦をイメージしているのだ。

無傷の状態なら一撃を与えることが出来る可能性はかなり高い。

だが、ボロボロの状態で一撃を与えることが出来なければACGとの連戦では勝てない。

綾姫は死ぬ気で修行をしている。

力では圧倒的にA C Gのほうが有利だ。

だが綾姫は、一撃を与えることが出来れば勝てるイレイズブレイドを持っている。

イレイズブレイドを操ることが出来るのは綾姫しかない。

イレイズブレイドが綾姫の手から離れたらただの剣だ。

もちろん、一度イレイズブレイドを手放しても、もう一度綾姫が持つとイレイズブレイドの力は発揮される。

だから必死に綾姫を鍛える必要があるのだ。

綾姫はA C Gにとって天敵なのだから。

だがここで疑問がしよじる。

なぜA C Gは天敵の綾姫を今すぐにでも殺さないのか。

それはまだ分からない。

3時間後。

「ちょっと休憩しよう」

総司令官は綾姫にそう言った。

「はい」

綾姫は額の汗を手で拭い、攻撃をやめた。

「まだまだ強くなるぞ、綾姫は」

「はい、頑張ります」

「はっはっは、冗談だ」

「そこは冗談じゃ困るんですが…」

「はっはっは、冗談だ」

「もう何がなんだか分かりません」

「綾姫は強くなるぞ。」

身体が回復したら全身に重りをつけてさっきの続きだ」

「はい」

綾姫はしばらく休憩をした。

「やっとついたぜ」

龍夜は祠の前にたち、つぶやいた。

祠の入り口には小さなドアがあり、祠はかなり小さかった。

祠の入り口を護るように男が目をつぶって座っていた。

「おい、その男、止まれ」

祠を護っている男に声をかけられた。

「すげえな、目を閉じてるのに俺が男だということを見抜くとはな」

「貴様は何をしに来た？」

祠を護っている男は目を開け、龍夜を見ながら言った。

「精霊の力を手に入れるために来た。
そこをどけ」

「そうか、ならば私を倒してから行け。
第一の試練だ」

祠を護る男は座ったまま龍夜に言い放つ。

「やってやろうじゃねえか」

龍夜は水の波を前方から発生させ、祠を護る男を飲み込んだ…はずだった。

男に向かっていった水の波はそのまま龍夜のもとへ戻り、龍夜を飲み込んだ。

「…（俺の能力を跳ね返した？
いや、ただ跳ね返しただけじゃない…！

俺は水の能力者。

俺相手には水は全く効かないはず。

水をコントロールすることで威力をゼロに出来るからだ。

だが、跳ね返ってきた水はコントロール出来ない。

なぜだ…？」

「我に当たる攻撃は全て反射する。

反射した攻撃は必ず、攻撃をした奴に跳ね返り、必ず命中する。

我がここにいてだけで最強の壁になる。

我にはいかなる攻撃も通用しない。

絶対攻撃反射の能力者だ」

「なぜ跳ね返ってきた水で俺にダメージを与えられるんだ？」

「コントロールが出来ないようにして跳ね返したからだ」

「常識はずれだぜ。

だが、お前を倒す方法が必ずあるはず。

じゃないと試練をクリアできないからだ」

「その通り、我を倒す方法が一つだけある。

だが、その方法は教えることは出来ない。

この祠の奥にいる水の精霊様に口止めされているからだ」

「了解」

こうして、精霊の力を手に入れるための第一の試練が始まった。

第十四話 絶対攻撃反射能力の弱点

「さうで、どうやってお前をぶっ倒すか…」

龍夜は精霊の祠を護る男の史上最強の能力を相手に苦戦していた。

「あまり時間をかけすぎるとお前の身体はボロボロになるぞ。
水蒸気爆発なんてもつてのほかだ。

発動したら、我の能力によってお前に跳ね返り、お前は間違いなく死ぬだろうな」

「わざわざ教えてくれるとは優しいな、お前。
確かにその通りだろうな。

俺が放った能力はコントロールが出来ないだけじゃなく、威力もかなり上がってるみたいだからな。
自分でくらってみて分かったよ」

龍夜はあれから色んな攻撃をしたが、全て跳ね返ってきた。

跳ね返ってきた攻撃は、威力が10倍以上に増幅する。

身を持って体験したから確実な情報だ。

「水蒸気爆発がダメとなると…
あとは何かがある…？」

龍夜は考えた。

水を高速で射出しても跳ね返ってきて龍夜の右足を貫通させたし。

敵を凍らせようとしたが、逆に自分が凍ってしまい、自分の能力で氷をなんとか砕き、脱出するはめになったし。

直接ぶん殴ろうとしたが、殴ろうとした拳が跳ね返ってきて自分の顔をぶん殴ってしまったし。

ありとあらゆる攻撃をやりつくしたが、敵には傷ひとつ与えられないどこか、触れることすら出来なかった。

「私の回りには円形のバリアがある。

絶対攻撃反射のバリアがな。

このバリアが破壊されたら我はただの人間だ。

さあ、どうやって破壊する？」

男は龍夜を挑発した。

「ホントに破壊できるんだよね？」

龍夜は絶望して、試しに聞いてみた。

「もちろんだ」

男は即答した。

「はあ、どうしたものか……」

その頃、本部では綾姫の修行が再開されていた。

綾姫の身体にはたくさんの重りがついていて、動きがかなり遅いな

かでの実践訓練が行われていた。

「46人の化け物達と戦うにはこれくらい出来なきゃダメだ。いくら一撃を与えるだけでいいと言っても無傷で勝てるとは思えないからな。」

傷をおって、ボロボロになった状態でも戦えないといけない」

総司令官は綾姫の攻撃を軽々かわしながら言った。

「はい！」

綾姫は真剣に修行に取り組んでいる。

ACGが攻めてくるまであと2日。

恭子やさつきや貴志や美由紀は能力向上トレーニングをしていて、徐々にだが確実に強くなっていた。

この戦いでの恭子達は綾姫や龍夜の援護が主な役割だ。

綾姫と龍夜をメインにそれ以外の者は援護。

貴志は近距離能力なので、隠密行動がメインで敵に気付かれないように近づき、攻撃するという役割だ。

それぞれの役割によって修行内容が変わるため、同じ役割同士が集まり、実践訓練を行っている。

攻撃の要である綾姫は総司令官が直々（じきじき）に訓練をしているが。^{かなめ}

そのおかげで綾姫はすごい速さで強くなっていた。

もともと綾姫には戦いの才能があっただらしい。

始めは軽かった重りも今では、考えられないほど重たい。

綾姫が身体中につけている重りは適度に外された。

食事をしているとき等にこまめに重りは外された。

人間は休憩きゅうけいしている間に筋力がつくからだ。

筋肉がつく仕組みとは、筋力トレーニングをすることによって筋肉が破壊され、休憩することにより破壊された筋肉が回復され、太く、大きくなるのだ。

綾姫はこの修行を一日繰り返すことによって、昨日より筋肉がついてたくましくなった。

たくましい女性というのはいかがな者だろうか？

綾姫はそんな事を頭の片隅で考えたが、ACGの奴らに殺されるよりはましだと思って、修行を続けた。

「水と氷を同時に放つたらどうだ！」

龍夜は叫び、右手で水の球を、左手で氷の槍を形成し、同時に男に

射出した。

だが、綺麗に跳ね返ってくる。

それをかわそうとするが跳ね返ってくるスピードが速すぎたため避けきれず、二つとも直撃した。

「……ダメか…」

龍夜の身体はすでにボロボロになっていた。

「……（何かないのか？

あいつのバリアを破壊する方法。

もうありとあらゆる攻撃はやったが全く効かなかった）」

龍夜は頭の中で考えたが、良い答えは浮かばなかった。

「お前、最強の能力者だな。

ACGって奴らを倒すのに協力してくれよ」

龍夜はダメ元で頼^{だめもと}んでみた。

「ACGという奴らは全員、違法な方法で精霊様の力を使っている。正しくは、精霊様のような力を使っている。

精霊様の力を使うことが出来るのは精霊様の試練をクリアした者のみ。

で、話しは戻るが…

偽物の力でも精霊様の10分の1くらいは使えている。

だから、我ではACGという奴らは倒せない。

とてつもない力の前では我のバリアは全く役に立たないからな」

男は丁寧に説明した。

その瞬間、龍夜は不気味に微笑んだ。

「つまり、俺のフルパワーで攻撃すればお前のバリアは破壊できる
ってことだな？」

「あ…！」

男は自分の口を押さえたが時すでに遅し。

「お前、やっぱり優しいな」

龍夜はバカにしたように男を笑った。

「だが、ヘタをしたらお前が死ぬことになるぞ？
それでもやると言うのか？」

「あいにく、死ぬ覚悟は出来てるんでな。
いちかばちか、俺の力にかけてみる」

龍夜は水蒸気爆発を発生させるために、これまでにない規模で水の
球体を作り出した。

「行くぞ！」

龍夜の叫び声と共に巨大な水の球体は一瞬で気化して、とてつもない
破壊力の水蒸気爆発を発生させた。

周りに被害が及ばないように水蒸気爆発をコントロールして、男にだけ放った。

その結果、見事にバリアが砕けた。

「俺がバリアを砕いたから、第一の試練はクリアだよな」

「ああ、そうだな。

先に進め、次の試練を受けてこい」

「言われなくてもそのつもりだ」

龍夜は祠ほこらの入り口へ入った。

外から見るとかなり小さかった祠ほこらだが、祠の中は、別の空間にワープしたといっても過言じゃないくらい広かった。

「どついう仕組みなんだ？」

龍夜は長い通路を歩きながらつぶやいた。

当然のように返事はない。

やがて、広場のような場所にたどり着いた。

広場の中心に人が立っていた。

「ここが第二の試練の舞台です」

若い女性だった。

「で、何をすれば良いんだ？」

「第二の試練の間、あなたの能力を封印します。

そして、生身の身体で私と戦ってもらいます。

私にダメージを与えることが出来れば合格。

ちなみに私はあなたの持っている能力を使わせてもらいます。

あなたみたいにくまくは使えませんが、生身の人間相手なら出来ます。

それではよろしいですか？

準備が出来たら私に声をかけてください」

「……（俺の能力をあいつに渡し、俺は能力なしで戦わなきゃならないのか…

自分の能力をどこまで把握出来てるかが重要なポイントだな）」

「準備オツケーだ」

「なら、たった今からあなたの能力を封印します」

龍夜は能力が吸いとられるような感覚がした。

「はい、これであなたは全く能力が使えなくなりました。

それでは始めましょうか」

「始めよう」

龍夜はそう言って女に向かって走り出した。

女は水の弾丸を射出して龍夜を攻撃するが、龍夜は余裕でかわした。

「初心者が使う水の能力じゃ、出来ることはかなり少ない。それに、攻撃力が低い。」

「19年も使い続けて来たんだ。自分の能力ぐらい把握できてる」

龍夜は余裕の表情を浮かべたが、一瞬で青ざめた。

「能力者はどんなに弱い能力でも人間より遥かに高い耐久性を持っている。」

生身の人間じゃダメージすら与えられないほどに」

龍夜は能力についての基礎知識を思いだし、声に出した。

「つまり、俺ではお前に傷ひとつ与えることが出来ない……！」

龍夜は走るのをやめた。

「でも、必ず私にダメージを与える方法があります。しかし、今のあなたにそれが出来るかはわかりませんが……」

「……ちくしょう、かなり難しい試練ばかりだな。まあ、覚悟はしてただけだな」

能力者を相手に生身の身体で勝つのは不可能に等しい。

剣や斧みたいに武器を使えば傷くらいは与えることが出来るかもしれないが、あいなく龍夜は武器は何も所持していない。

殴っただけじゃ絶対にダメージは与えられない。

龍夜は相手の攻撃をかわしながら考えるが、打開策は見つけられなかった。

「よし、寝る」

龍夜は相手に言った。

「わかりました。」

それでは休憩してください」

相手は攻撃をやめてその場に座った。

龍夜はその場に横になり、死んだようにぐっすりと眠った。

翌日…

「ACG、予定より早かったわね」

綾姫は修行をしている時に、見張り役の人間の報告が放送で本部内に伝わって、その報告を聞いてつぶやいた。

「だが、結界がある。」

いくら精霊の力を持っていても一日はかかるはずだ」

総司令官は綾姫にそう言って修行を再開しようとした。

その時、バリーンという音が響いた。

「破られちゃったみたいだけど…？」

「……綾姫、頼んだぞ。」

龍夜がないからお前一人が頼りだ。
私達はお前の援護をする」

「はい、じゃあすぐに行つてきます」

綾姫は身体につけている大量の重りを外して、入り口へ向かった。

入り口には30人くらいのACGと思われる奴らがいた。

「ちよつと数が多すぎない？」

綾姫はため息を漏^もらした。

「綾、頑張つてね。」

あたし達は全力で援護するから」

さつきが綾姫に言った。

「うん、じゃあ行つてくる」

綾姫はACGの集団に向かって走っていく。

走りながら剣を抜き、次々に斬っていく。

本部の能力者は敵の動きを鈍らせるような攻撃を繰り返し、綾姫の援護をした。

そのおかげで、ACGの奴らは次々に精霊の力を失っていく。

やはりイレイズブレイドを持つ綾姫はACGにとって天敵なのだ。

綾姫は傷をおいながらも攻撃を繰り返した。

2時間後には、30人くらいいたACGは2人に減っていた。

「くそつ、こいつ強い」

「あの剣に触れただけで精霊の力が消えてしまふみたいだな」

残った二人はそうつぶやいた。

綾姫は修行により、イレイズブレイドの能力をあげていた。

イレイズブレイドに触れた能力を消す力。

前までは斬らないと能力は打ち消せなかったが。

そして、イレイズブレイドを自在に操ることが出来るようになった。

これにより、剣を敵に向かって投げ、かわされたら空中で方向転換をして敵に向かっていく。

イレイズブレイドに触れていなくても、ある程度の距離なら操ることが出来る。

敵はイレイズブレイドに触れた瞬間に能力が消されるので、絶対にかわさないといけない。

残った二人もなんとか倒せた。

「はあ、No.12までは倒したわね…
疲れたわ…」

綾姫は剣を鞘におさめてつぶやいた。

「そうね、でも休憩してる時間はないみたいだよ」

すぐさまACGの増援が到着した。

No.11からNo.1。

「No.1がリーダー？」

綾姫はつぶやいた。

「違う、レオンハルト様はここにはいない」

No.1の男が答えた。

「レオンハルト、それがリーダーの名前ね」

「貴様ごときが呼び捨てして良い方ではない！」

休憩する時間はなく、すぐに戦いが再開された。

「はあ、ようやくわかったぜ。
お前を倒す方法がな」

龍夜は攻撃をくらい、ボロボロになった時によつやくひらめいた。

第十五話 レオンハルト・ヴァイザード

「その方法とは、どんな攻撃ですか？」

倒す方法をひらめいた龍夜に対して訊ねた。

「お前の能力を操る。

さつきからちよつと挑戦しててな、ようやく出来るようになった」

龍夜は攻撃をくらいながら、その攻撃をコントロールしようとしていたのだ。

「なら、やってみてください」

相手は水の能力で龍夜を攻撃する。

龍夜はそれをコントロールし、相手に跳ね返した。

だが、相手はそれを回避する。

「確かにコントロール出来ていますね。

ですが、その攻撃は簡単に避ける事が出来ます」

「ならこれはどうだ！」

龍夜は生身の身体であるはずなのに水の能力を発動した。

水は高速で射出され、避けきれないほどの数があった。

「バカな…！」

相手は驚き、龍夜の放った水の攻撃をまともにくらった。

「お前がさっきから使っていた水の能力を身体のなかに蓄えておいたんだ。

それを放出しただけだ」

「…そんなことが出来るとは。
第二の試練はこれで終了です。
力をお返しします」

相手は水的能力を龍夜に返した。

「次で最後の試練となります。
これまでより遥かにつらい試練が待っています。
命を落とすことになるかもしれませんが、それでも行きますか？」

「当たり前だ、死ぬ覚悟ならとつくに出来てる」

龍夜はそう言い残し、奥へ進んだ。

「はあ、はあ、はあ…

ようやく全滅…

あとはリーダーのみね」

綾姫は傷だらけで、立っていることが出来ずその場に座っていた。

「まったく、一撃与えるだけなのにこんなにつらいとは思わなかったわ。

でも、リーダーはもっと強いはず。

龍夜、早く戻ってきてよ」

綾姫は天を見てつぶやいた。

「さすがイレイズブレイド。

俺の部下を全員倒してしまうとは。

まあ、予想はしていたが。

だから2日も時間をついやして新たな力を手に入れたんだが」

赤い髪の男：ACGのリーダーと思われる人物が綾姫の前に現れた。

「あんたがリーダー？」

綾姫は訊ねた。

「そうだ、俺がACGのリーダー。レオンハルト・ヴァイザードだ。お前達を殺しに来たんだが、殺す前に話してやる。

俺の目的を」

レオンハルトは丁寧に説明し始めた。

「俺の目的は能力者の絶滅。

なぜ能力者を絶命させるかというと、この世界を元の世界に戻すため。

能力者がいなくなればこの世界は平和になる。

今や能力者の犯罪は日常茶飯事。

そいつらを全て殺せば能力者はこの地上にはいなくなる。

新しく能力者が誕生することもない」

「ちよつと待つて、新しく能力者が誕生しないってなんで言いきれ
るの？」

能力者はある日突然能力に目覚めるのよ？」

「おや、お前は能力者が誕生する仕組みを理解していないのか？

能力者が誕生したのは今から100年以上前になる。

科学の実験をしていたある男が人体実験をしたのだ。

自分の身体を化け物にするためにね。

その男は実験に成功して能力を手に入れた。

それが初めての能力者だ。

能力者は少量だが、オーラを持つている。

そのオーラが人に接することにより他人に能力を分け与えることが
出来た。

だが、すぐに能力に目覚めることはなく、徐々に目覚めていく。

そして、感情と共に能力に目覚めるのだ。

幼い赤子で能力に目覚めた奴は氷室龍夜しかないが、彼の場合は
父親が強い能力者だったからだ。

強い能力者であるほどオーラは多い。

彼は大切に育てられたんだろうな。

片時も離れることなく育てられ、父親の放つオーラによって能力に
目覚めた。

つまり、能力者が絶滅すればこの世界に能力者が誕生することはな
いのだ。

俺は目的が達成できたら死ぬつもりだった。

仲間を含めて全員殺すつもりだったんだ」

「…あんたの話が本当だとしたら、能力に目覚めていない人間もい
つかは能力に目覚める可能性がある。

つまり、殺しても殺してもキリがないと思っただけど？」

「そう、その通りだ。
だから俺は考えた。

たとえ今いる能力者を絶滅させてもオーラに触れていた一般人はやがて能力に目覚めてしまう。

そこで俺は精霊に頼ることにした。

精霊の力を持つてすれば能力に目覚める一般人を救うことが出来る。俺は違法な方法で精霊を身体に宿した。

そして、その力を仲間に分け与えた。

精霊が放つオーラによって能力に目覚める一般人を阻止できる。

だが、今いる能力者を殺さなければ意味がない。

だから俺は能力者を絶滅させることにした。

仲間を集めるのは簡単だった。

戦いが好きな能力者を倒し、強い力を与えて部下に招き入れるだけだったからな。

俺は集まった仲間に、能力者を絶滅させるように言った。

言うことを聞かない奴は力づくで分からせた」

「あんたは、あんたなりに世界を救おうと考えていたのね。
何が間違っで、何が正しいのかなんてあたしには良く分からないけど、どんな理由があるにしろ、人を殺すのはダメだと思う」

「それは綺麗事きれいごとと言うのだ。

俺は間違っでなどいない、決して！

話しはこれで終わりだ。

俺は目的のためにお前達を殺す。

言っとくが俺は、部下みたいに弱くはないぞ？」

「上等じゃない、やってやろうじゃない！」

綾姫の身体はボロボロだ。

だが、負けるわけにはいかない。

その想いだけが綾姫を戦わせた。

「お前はどこに足をつけている？」

突如、地震が発生した。

「くっ！」

綾姫は体制を崩してその場に倒れた。

「俺の能力は土。

そして、炎。

俺がここを攻めるまでに手に入れた力だ。

土は元から持っていてな、ついさっき炎の能力を手に入れたばかりだ」

「二つの能力を持っているなんて……！」

「土と炎よ、融合して地上に降り注げ！」

綾姫の頭上から隕石みたいなものがいくつも降ってきた。

「みんな、逃げて！」

綾姫は本部のなかにいる者達に言ったが、逃げ遅れた者が多数。

逃げ遅れた者は見るも無惨に死んでいった。

生き残ったのは綾姫とさつきと恭子を含んだ数名のみ。

「……許さない、絶対に許さない！」

綾姫はぶちギレた。

レオンハルトに向かって突撃して剣を振るうが、あっけなくかわされた。

「お前では俺に勝てない」

レオンハルトは余裕の表情を浮かべて綾姫を攻撃した。

「きゃあああああ！」

綾姫はレオンハルトの攻撃をまともにくらい、倒れた。

「こいつ、けた外れに強い……！」

龍夜、早く来て……」

「お前が水の精霊か？」

龍夜は奥へと進んで行き止まりにたどり着いた。

「その通り、我は水の精霊なり。」

お前に最後の試練を受けさせる。
ルールは簡単だ、我に触れればお前の勝ち。
さあ、かかってこい」

「触れるだけで良いなら簡単さ。
これが一番簡単かもな」

龍夜は背後で水蒸気爆発を発生させて水の精霊に突進した。

「甘い」

水の精霊はピクリとも動かず、突撃してくる龍夜を弾き飛ばした。

「ぐはっ……」

龍夜は口から血を吐き倒れた。

「我は水的能力を使ってお前を攻撃しただけだ。
水蒸気爆発を使って、な」

「水蒸気…爆発っていう…レベルじゃ…ねえぞ……？
俺は…水の…攻撃なら…ダメージは…くらわない…はずだ…」

「我の水の力はお前の力を遥かに凌駕している。
果たして我に触れることが出来るか？」

「……（くそっ、こいつはやバイぜ…
さっきの一撃で身体が自由がきかない。
ダメージがでかすぎた。
なめてかかったら100%死ぬ…！」

美由紀達が危険な目にあっているのがわかる。

感じるんだ、不吉な予感を心で俺は感じている。

俺は美由紀を護ると決めた！

早くこいつの試練を終わらせて、美由紀を助けにいかねえとならねえんだ！」

「ああああああ！！！」

龍夜は叫び声と共に全能力を解放した。

右手に宿ったマスターアビリターの紋章が激しく輝いた。

まるで、龍夜を応援するかのように。

「…（こいつ、けた外れにパワーアップした…
強い思い…誰かを護りたいという強い思いがここまで人を強くする
ものなのか…！？）」

龍夜は精霊に向かって突撃していく。

精霊は攻撃をしないで龍夜のパンチをくらった。

「お前の勝ちだ、人間よ。

お前の強い思いに負けたよ。

我の力を全て使えばお前を退ける事が出来たが、お前になら我の力を与えても良いかと思ひ、しなかった。

これで試練は終了だ。

傷を回復してやるう」

精霊は龍夜の肩に触れ、回復させた。

「我が力、お前と共に。
私の力により、瞬間移動をする。
場所は能力者犯罪捜査組織の本部で良いな？」

「ああ、頼む」

「承知した。
目を閉じる」

龍夜は目を閉じた。

「目を開けて良いぞ」

龍夜が目を開けると、綾姫とレオンハルトが戦っている光景が目に入った。

精霊は龍夜の身体の中に入って、龍夜の力と融合した。

「待たせたな、綾姫」

「龍夜…遅いわよ…」

あいつが…リーダー。

他の奴らは…全員倒したわ…

あとは…あいつだけ」

綾姫はそれだけを言って目をつぶった。

「ゆっくり眠れ、綾姫。
あとは俺に任せろ」

「お前が氷室龍夜だな？」

レオンハルトが龍夜に訊ねた。

「ああ、そうだ。

悪いが、話をする時間は与えないぜ。

貴様は許さねえ、死んでもらうぞ」

龍夜は精霊の力と融合して強くなった水の能力でレオンハルトの心臓を打ち抜いた。

「がっ！

お前…精霊の…力を」

「ああ、ついさっき手に入れてきた。

違法な方法で手に入れた力じゃ、俺には勝てないぜ」

龍夜は話しながらも攻撃の手は休めない。

レオンハルトは蜂の巣みたいに穴だらけになった身体でよろめいた。

「ぐっ！

時間を…与えたのが…裏目にでたか…

ならば…もうこの…世界を…消し飛ばす！」

レオンハルトは全能力を解放して、天空に巨大な隕石を作り出した。

デュアルアビリティ
「二重能力か…？」

ヤバイな、全能力をぶつけても打ち消せるかわからない。

あんなのが地上に衝突したら間違いなく地球は破壊される。

綾姫は眠ってるからイレイズブレイドを使えない。

ならば、俺がやるしかない……！」

龍夜は自分の身体を水蒸気爆発で天空に飛ばして巨大な隕石に向かっていった。

最終話 冷たき雨

「うおりゃあああああああ！！！！」

龍夜は巨大な隕石の目の前にたどり着いた瞬間、自分の全ての水の力をぶつけた。

レオンハルトの作り出した巨大な隕石は土と炎で出来ているため、水が有効なのだ。

「くっ、ダメだ！
力が足りない……！」

龍夜は精霊の力と共に自分の体力や気力、精神力を使って上乗せうわのした。

これ以上やり続けると龍夜の身体は消えてしまう。

だが龍夜は、たとえ自分が死んでも地球を救ってみせると心に決めて能力をぶつけ続けた。

「……………（あと少し、あと少しで打ち消せる……！
……身体が消えかけてきた……
だが……みんなを護らなくちゃ……ならねえ。
これが……俺の精一杯の……つぐないだ……！）」

「隕石が……消えた……！」

さつきは天空に浮かんだ隕石を見ていて、それがなくなったのを見逃さなかった。

「やったのね、彼」

恭子もつぶやいた。

「お兄ちゃん、さすがだよ」

美由紀もつぶやいた。

その瞬間、天空から冷たい雨が降り注いだ。

その雨は、レオンハルト達に殺された人々を生き返らせた。

綾姫も目を覚ました。

「龍夜…？」

綾姫はとてつもない不安にかられた。

「龍夜！龍夜は大丈夫なの！？」

綾姫は周りの人間に訊ねた。

だが、みんなは口を揃えて、わからないと答えた。

「龍夜…」

まるで龍夜の身体が水となり、地上に降り注いでいるみたいで…

綾姫は不安を早くなくしたかった。

降り注ぐ冷たき雨は龍夜の身体の一部だと思った。

それは、みんな同じ考えだった。

隕石が消滅してから10分が経過しても雨は降り続いていて、龍夜は姿を現さない。

「そんな…龍夜…!!」

綾姫は大粒の涙を流していた。

綾姫だけじゃなく、さつきも恭子も美由紀も貴志も、みんな涙を流していた。

「龍夜あああああ!!!!」

綾姫は天に向かって叫んだ。

「あたしは龍夜が好き…!」

いつもあたしをからかうけど、あたしは龍夜が好きなの!
なのに…気持ちを伝えることも…出来ないなんて…!」

綾姫は届かぬ想いに悲しみ、子供のように大声で泣きじゃくった。

「龍夜…気の合う親友になれたと思ったのに…」

さつきも龍夜の事を想い、泣きじゃくった。

「あなたは凄いわ。

ちゃんとみんなを救った。

でも、お礼くらい言わせなさいよ……」

恭子も泣きじゃくった。

「お兄ちゃん、死んでなんかないよね……？」

お兄ちゃんは……！」

美由紀も泣きじゃくった。

「龍夜さん、僕はまだあなたにお礼を言っていないですよ……」

一人前にしてくれたり、暴走した僕を助けてくれたり……

龍夜さん……僕は……！」

貴志も泣きじゃくった。

天空から降り続いている雨は水の精霊の治癒能力によって傷ついた者を治したが、龍夜は治せないのか……！？

それから一年後……

「綾、事件だよ。

現場に向かつてもらえる？」

さつきは綾姫に言った。

綾姫はあれから狂ったように仕事に取り組んだ。

龍夜が死んだ悲しみを消すように…

悲しみは時間が解決してくれるはず、そう思ったが何もしてないと龍夜の事ばかり考えてしまう。

仕事をして、気をまぎらわすことで自我を保った。

「うん、じゃあ行ってくるわ」

綾姫は車で事件現場へ向かった。

未だに能力者の犯罪は消えない。

能力者がこの世界に存在する限り、能力者の犯罪は消えないのかもしれない。

今なら、レオンハルトの目的が理解できた。

レオンハルトも自分なりに考えた結果が能力者絶滅という結論に至ったのだろう。

だが、綾姫はレオンハルトを許さなかった。

綾姫はレオンハルトを殺したのだ。

初めての殺害だ。

レオンハルトのせいで龍夜は死んだ。

今でも綾姫はレオンハルトを恨んでいる。

死んだ者を恨んでもむなしただけだとわかってはいたが、恨まずにはいらなかった。

綾姫は事件を軽く解決して能力者犯罪捜査組織へ戻った。

見張り役の佳奈はいなかった。

不思議に思いながら中へ入っていったが、誰一人いなかった。

総司令官室にも誰もいない。

総司令官室の綾姫の机の上に一枚の紙が置いてあった。

「訓練場に来て。

さつきより」

紙にはそれしか書かれていなかった。

綾姫は不審に思いながらも訓練場へ向かった。

………

………

…

「綾、おかえり」

訓練場ではさつきが綾姫を迎えた。

訓練場の中には能力者犯罪捜査組織のメンバーが全員集まっていた。

「何？なんでみんな集まってるの？」

綾姫はさつきに訊ねた。

「お祝いしようと思ってね」

さつきはそう言って訓練場へ綾姫を引っ張っていった。

「お祝いって、何を祝うのよ？」

「綾を」

さつきは即答する。

「あたし？誕生日はまだ先だけど？」

綾姫は自分が祝われる理由が全くわからない。

「相変わらず間抜けな面^つだな、綾姫」

綾姫はそこにいるはずのない人物に話しかけられ驚き、声をなくした。

「ん？あまりの驚きでしゃべれねえのか？」

「あ、あ…あ」

綾姫は何かを言おうとしている。

「あ？」

「あんた、なんでいるのよ!？」

「ん？俺がいてはいけなかったか？」

「……心配したんだからね、龍夜」

綾姫は龍夜に抱きついた。

「…わりいな、俺もついさっき蘇生したんだ」

「蘇生？」

「ああ、水の精霊の治癒能力によってな。
そのかわり、精霊の力はなくなっちゃったけどな」

「……あたし、龍夜に言いたいことがあるの」

綾姫は抱きついていた身体を離して、下を向きながらもじもじした。

「なんだ？」

龍夜は綾姫に訊ねた。

「あたし……龍夜の…事が……好き…」

綾姫は自分の気持ちを龍夜にハッキリと伝えた。

「綾姫、顔が真っ赤だぞ？」

龍夜はまた綾姫をからかい、顔をかなり近づけた。

綾姫は顔を離そうとするが、龍夜が綾姫の肩を押さえて離さなかった。

「…は、離さないよ…！」

綾姫の顔はますます赤くなる。

龍夜は徐々に顔を近づけて、綾姫の唇にキスをした。

「ひゅーひゅー！
昼間から熱いね」

さつき達は二人をからかった。

「な、な…な……！」

綾姫は顔だけじゃなく、身体全身が真っ赤になっていた。

「綾姫、俺と結婚してくれ」

「……………はい」

綾姫は龍夜の申し出に素直にうなづいた。

それからすぐに二人の結婚式を行うため、みんな揃って結婚式場へ向かった。

あらかじめ用意してあったタキシードとウェディングドレスを着た二人は永遠の愛を約束した。

……

……

…

「俺はこれからも能力者犯罪捜査組織で仕事をやらせてもらう。つぐないではなく、俺がやりたいからだ。

文句はないよな？」

「当たり前よ、文句なんかないわ。でも、今日はデート…だから…仕事は明日からね」

二人は結婚式が終わったあと、二人だけで車に乗り、遊園地へ向かっていた。

デートの定番だからだ。

こうして、一年ぶりに綾姫は笑顔を見せた。

二人はこれから、幸せに生きていく。

また、ACGのような奴らが現れるかもしれないが、その時は二人で協力してなんとかする。

なんとか出来る自信があつた。

さつきはあれから能力を鍛えて、綾姫の側近そつきんとなつた。

立場は恭子を越えたが、力ではまだ恭子の方が上だ。

さつきは貴志と付き合い、やがては結婚をするつもりだ。

貴志はさつきにいいようにからかわれていたが、自然とつらくはなかつた。

恭子はモデルの仕事を掛け持ちし始めて、すっかり有名人になっていた。

佳奈は相変わらず見張り役を任されている。

時々、綾姫とプライベートで遊んだりしている。

美由紀はお父さんのお墓を立てて、能力者犯罪捜査組織のメンバーとして今まで通りの生活をした。

綾姫のおじいちゃんは実家に帰り、余生を楽しむことにした。

平和な日常だ。

この平和は絶対に取り続ける。

みんな、そう心に決めて生活をした。

綾姫と龍夜は遊園地でデートしたあと、能力者犯罪捜査組織へ帰ってきたが、さつき達にからかわれた。

龍夜もさつき達と一緒に綾姫をからかう。

だが、綾姫は怒らず、むしろ喜んでいるようだった。

「お前、Mなのか？」

「違うわよっ！」

「だってからかわれてんのに喜んでるから」

「あたしはこういう幸せな日常に喜んでたのっ！」

「言い訳は見苦しいぞ、綾姫」

「言い訳じゃないわよっ！」

その口、叩き斬ってやる！」

綾姫はイレイズブレイドで龍夜に攻撃する。

もちろん本気ではない。

「悪かったよ、これで許してくれ」

龍夜は綾姫の唇にキスをした。

「な、な……な」

綾姫は一気に顔を赤らめる。

「何すんのよおお！」

綾姫は喜びと恥ずかしさを見せながら叫んだ。

この幸せよ、永遠に続け…

みんな、心からそう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7450g/>

能力者犯罪捜査組織総司令官白木綾姫

2010年10月11日02時22分発行